

【平成28年度 全国在宅医療推進協会 会員勉強会】

在宅医療と地域包括ケア・システムから見た これからの『まちづくり』

～地域包括ケアの哲学～

自己紹介



川 井 真

【役職(学術)】

- ◆ 一般社団法人JA共済総合研究所 主席研究員
- ◆ 明治大学法学部 兼任講師
- ◆ 多摩大学大学院 客員教授
- ◆ 東京医療保健大学大学院 非常勤講師
- ◆ 明治大学 社会イノベーション・デザイン研究所 所長
- ◆ 明治大学 野生の科学研究所 事務局長
- ◆ 明治大学 死生学・基層文化研究所 事務局長
- ◆ 多摩大学 医療・介護ソリューション研究所 シニアフェロー

【その他の役職】

- ◆ シダックスグループ 社外取締役
- ◆ 特定非営利活動法人ふるさとテレビ 顧問
- ◆ 特定非営利活動法人全国在宅医療推進協会 監事
- ◆ IRB治験審査・倫理審査委員会 委員[非自然科学] など.

講演概要[目次]

1. 地域包括ケア・システムとは何か
2. 時代認識
 - ✓ 少子化と人口減少
 - ✓ 高齢社会の本質
3. 市民協働へのアプローチ
 - ✓ シェアという発想
 - ✓ 「働き方」の変革
 - ✓ 農の思想とケアの思想
4. 社会を再考する
 - ✓ 社会システム理論
 - ✓ 貨幣と労働
5. 文化を更新する
 - ✓ 社会的行動主義
 - ✓ 教育の意味と方法を考える
6. 失われた文明
 - ✓ 『逝きし日の面影』から見えてくるもの
 - ✓ コモンズと定常経済
7. ヒューマニズムとコスモロジー
 - ✓ 大森荘蔵からのメッセージ
8. 地域包括ケアとまちづくり

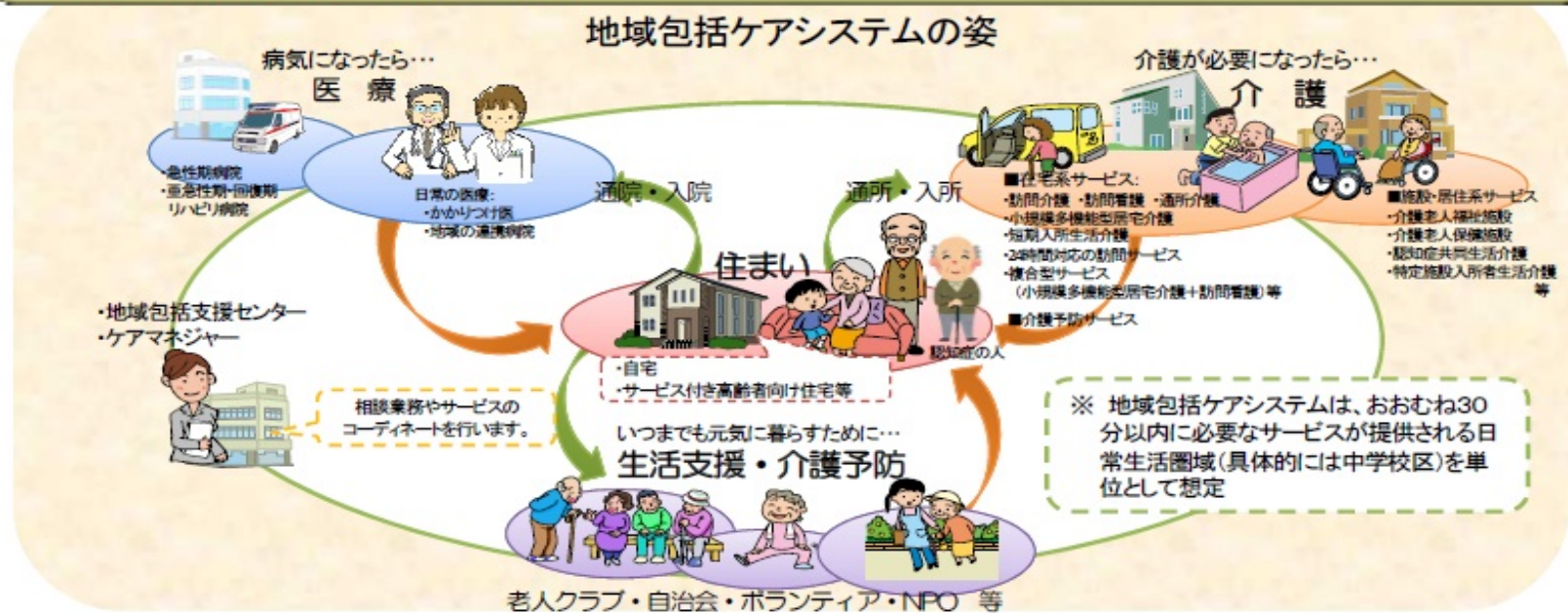
地域包括ケア・システムとは何か

厚生労働省の提案

地域包括ケアシステム

- 団塊の世代が75歳以上となる2025年を目途に、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、**住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築を実現**していきます。
- 今後、認知症高齢者の増加が見込まれることから、認知症高齢者の地域での生活を支えるためにも、地域包括ケアシステムの構築が重要です。
- 人口が横ばいで75歳以上人口が急増する大都市部、75歳以上人口の増加は緩やかだが人口は減少する町村部等、**高齢化の進展状況には大きな地域差**が生じています。

地域包括ケアシステムは、**保険者である市町村や都道府県が、地域の自主性や主体性に基づき、地域の特性に応じて作り上げていくことが必要です。**



地域包括ケアシステムの5つの構成要素と「自助・互助・共助・公助」

平成25年3月
地域包括ケア研究会報告書より

○高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で生活を継続することができるような包括的な支援・サービス提供体制の構築を目指す「地域包括ケアシステム」。

地域包括ケアシステムにおける「5つの構成要素」



「介護」、「医療」、「予防」という専門的なサービスと、その前提としての「住まい」と「生活支援・福祉サービス」が相互に関係し、連携しながら在宅の生活を支えている。

【すまいとすまい方】

●生活の基盤として必要な住まいが整備され、本人の希望と経済力に合った住まい方が確保されていることが地域包括ケアシステムの前提。高齢者のプライバシーと尊厳が十分に守られた住環境が必要。

【生活支援・福祉サービス】

- 心身の能力の低下、経済的理由、家族関係の変化などでも尊厳ある生活が継続できるよう生活支援を行う。
- 生活支援には、食事の準備など、サービス化できる支援から、近隣住民の声かけや見守りなどのインフォーマルな支援まで幅広く、担い手も多様。生活困窮者などには、福祉サービスとしての提供も。

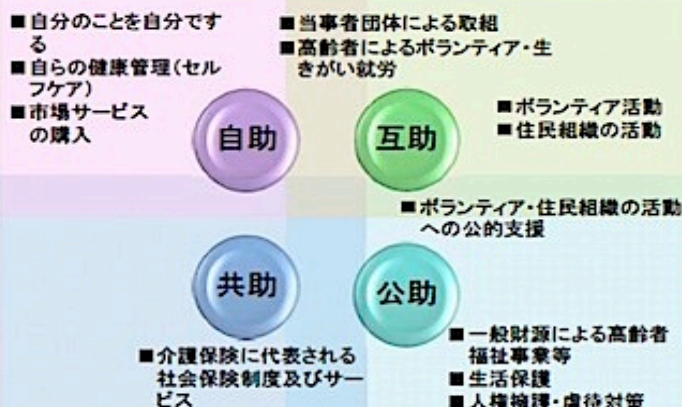
【介護・医療・予防】

●個々人の抱える課題にあわせて「介護・リハビリテーション」「医療・看護」「保健・予防」が専門職によって提供される（有機的に連携し、一体的に提供）。ケアマネジメントに基づき、必要に応じて生活支援と一体的に提供。

【本人・家族の選択と心構え】

●単身・高齢者のみ世帯が主流になる中で、在宅生活を選択することの意味を、本人家族が理解し、そのための心構えを持つことが重要。

「自助・互助・共助・公助」からみた地域包括ケアシステム



【費用負担による区分】

- 「公助」は税による公の負担、「共助」は介護保険などリスクを共有する仲間（被保険者）の負担であり、「自助」には「自分のことを自分でする」ことに加え、市場サービスの購入も含まれる。
- これに対し、「互助」は相互に支え合っているという意味で「共助」と共通点があるが、費用負担が制度的に裏付けられていない自発的なもの。

【時代や地域による違い】

- 2025年までは、高齢者のひとり暮らしや高齢者のみ世帯がより一層増加。「自助」「互助」の概念や求められる範囲、役割が新しい形に。
- 都市部では、強い「互助」を期待することが難しい一方、民間サービス市場が大きく「自助」によるサービス購入が可能。都市部以外の地域は、民間市場が限定的だが「互助」の役割が大。
- 少子高齢化や財政状況から、「共助」「公助」の大幅な拡充を期待することは難しく、「自助」「互助」の果たす役割が大きくなることを意識した取組が必要。

介護予防は暮らしのなかへ

＜進化する地域包括ケアシステムの「植木鉢」＞



〔出典：地域包括ケア研究会（平成28年3月）〕

なにを言わんとするものか？

**地域医療提供体制はシステムであり、
地域包括ケアは「哲学」である。**

誰が実行するのか？

地域包括ケアシステムが求めているのは
生き方そのものの変革であり、それは「まちづくり」である。
誤解を恐れずに言えば
それは新しい文明の創造である。

時代認識

日本社会の実態～少子化と人口減少

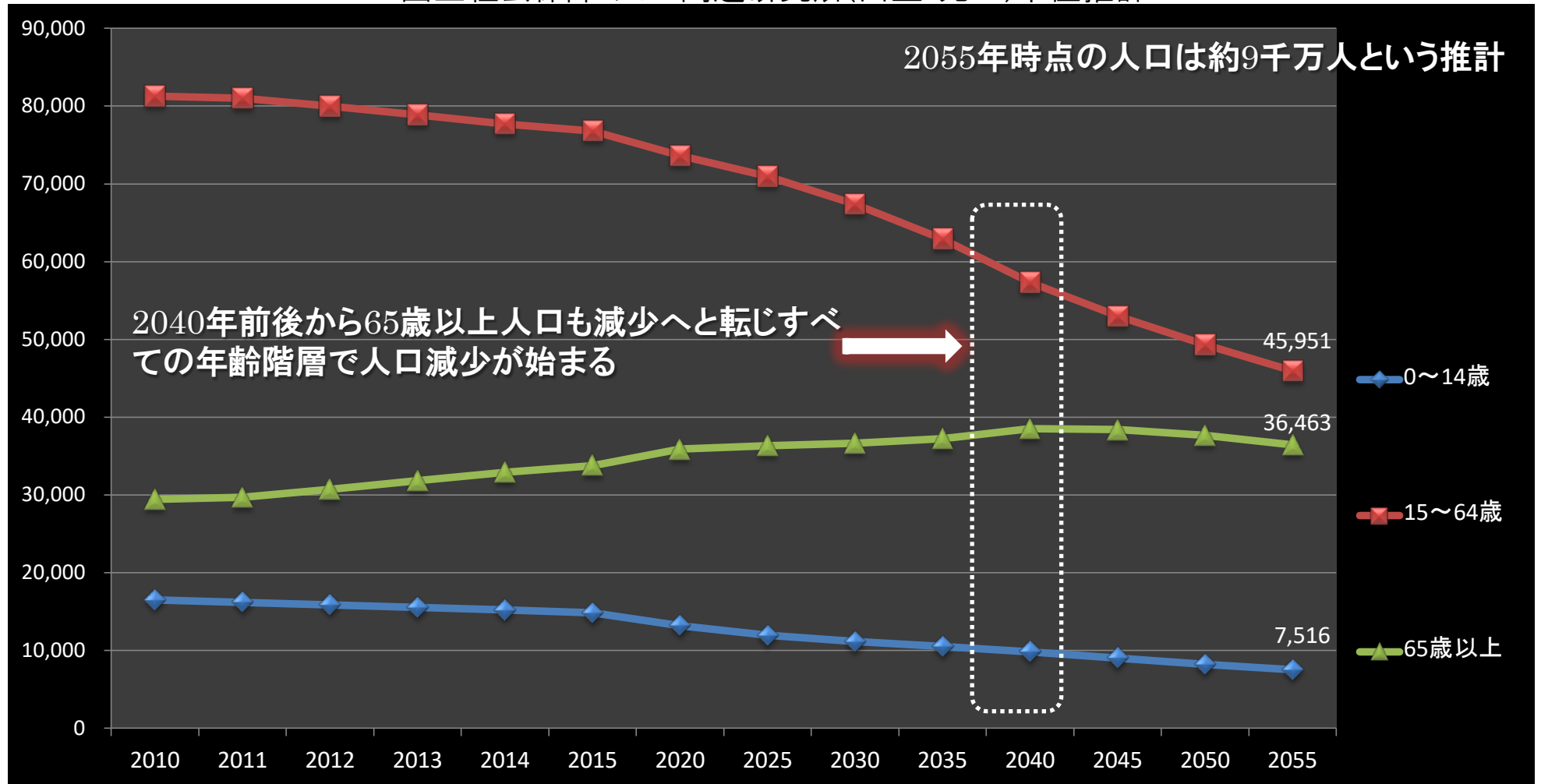
政府の掲げる「地方創生」の背景にあるもの

- ✓ 約10年後に迫ってきた本格的な高齢社会すなわち2025年問題の核心には「団塊の世代が老いるとき」というテーマが据えられている。
- ✓ しかし、団塊の世代の大半が大都市圏とその周辺地域で生活していることを考えれば、2025年問題とは「都市生活者の高齢化問題」であることがわかる。
- ✓ これまでは時間軸上で捉えられてきた“団塊”が、いまや「特定の場所への集中」というかたちで顕在化してきた。
- ✓ 政策の掲げる「地方創生」には、このような日本社会が抱える不自然な構造を是正したい、という意図も含まれている。

日本の将来推計人口

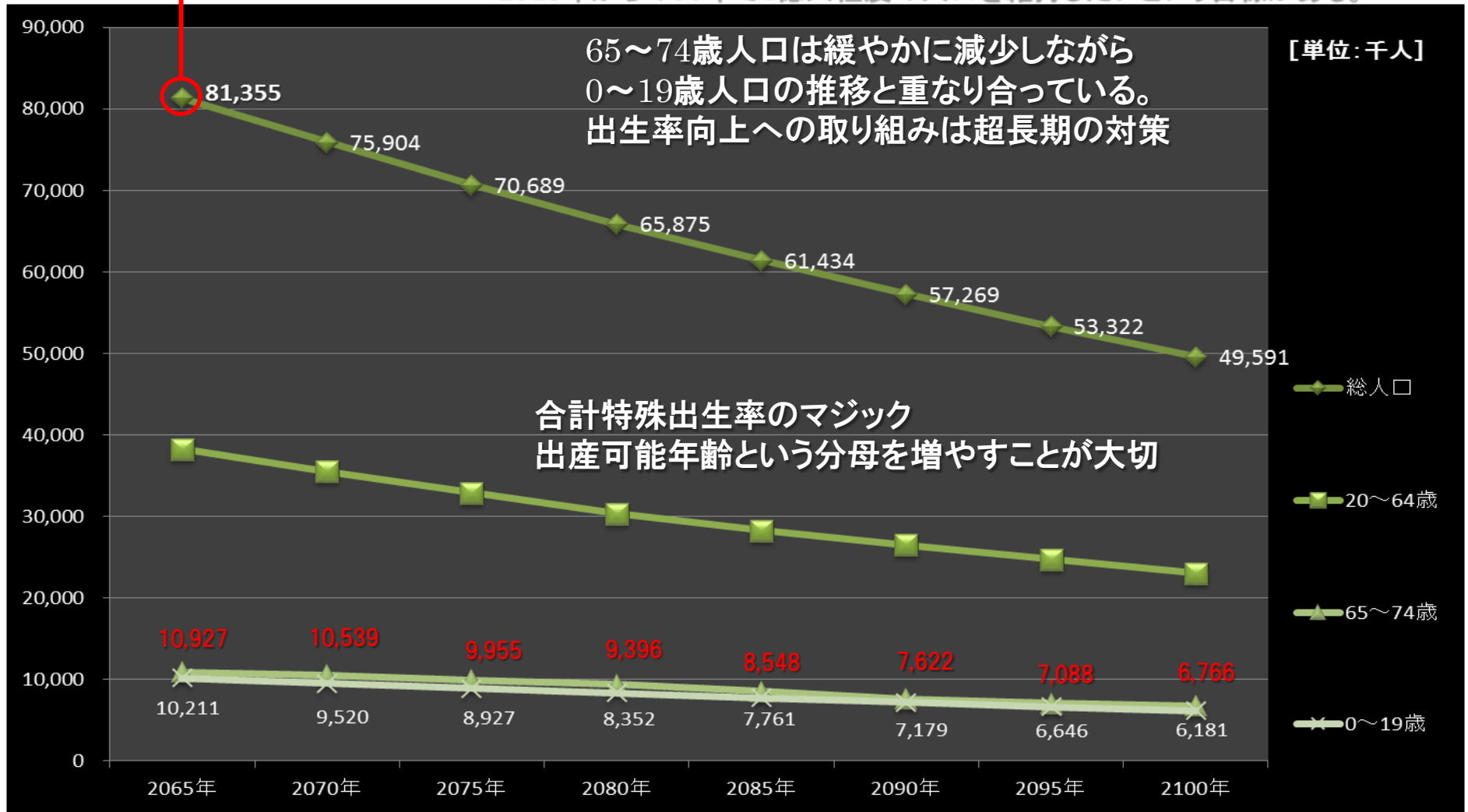
～農山漁村地域では都市部に増して従属人口指数が上昇している～

国立社会保障・人口問題研究所(出生・死亡)中位推計



日本人口の長期推計

→ 2015年からの50年で1億人程度の人口を維持したいという目標がある。

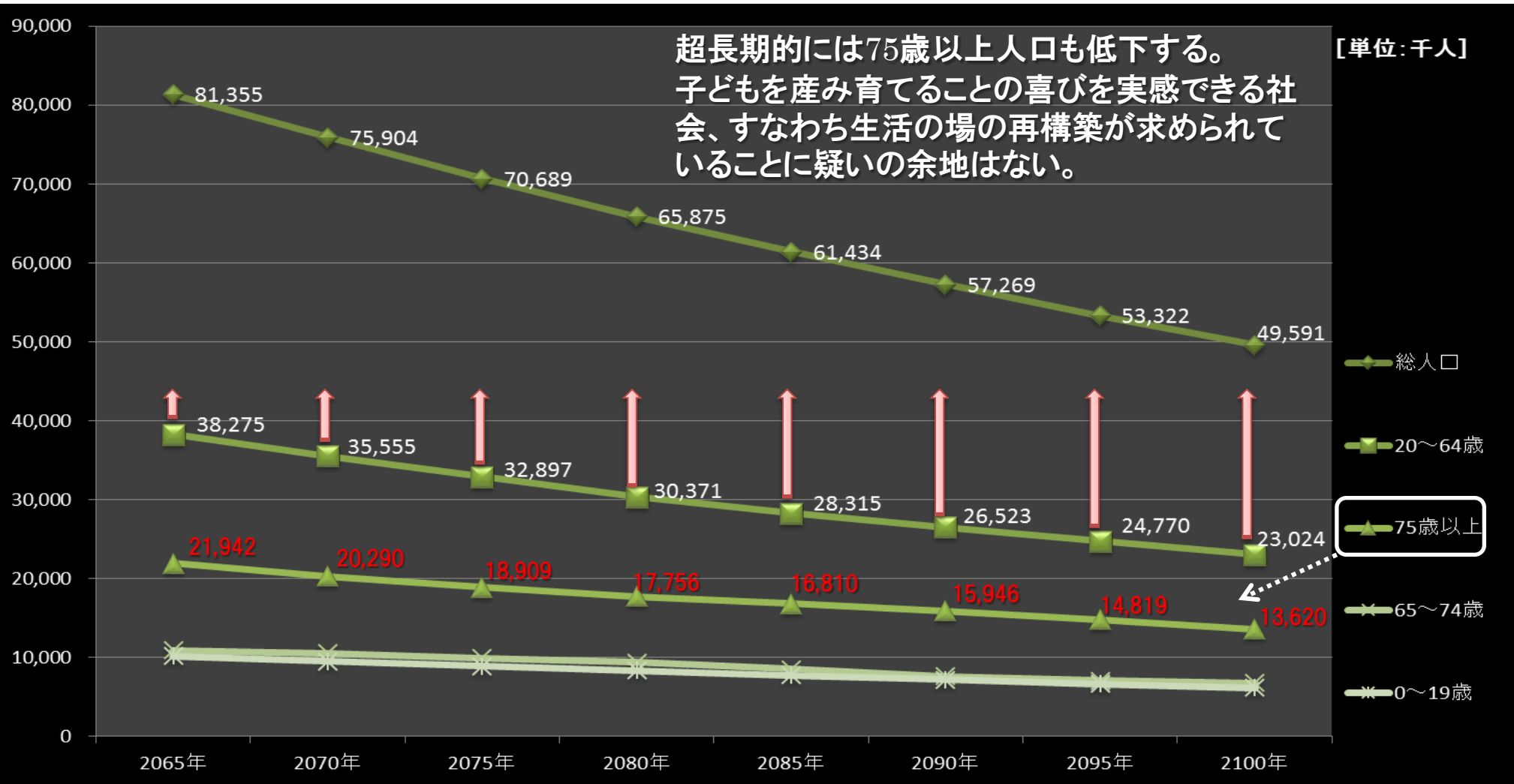


データソース: 国立社会保障・人口問題研究所 平成24年1月(出生中位・死亡中位)推計

75歳以上人口の長期推計

[単位:千人]

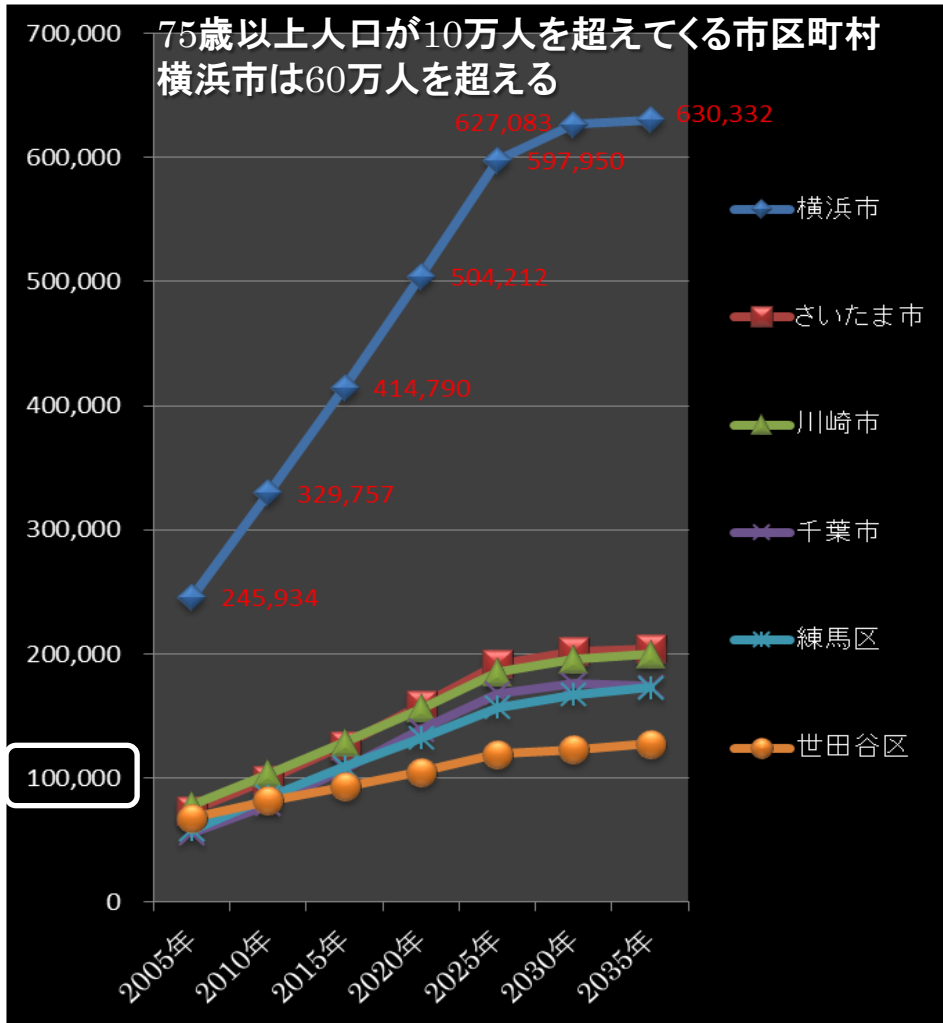
超長期的には75歳以上人口も低下する。
子どもを産み育てることの喜びを実感できる社会、すなわち生活の場の再構築が求められていることに疑いの余地はない。



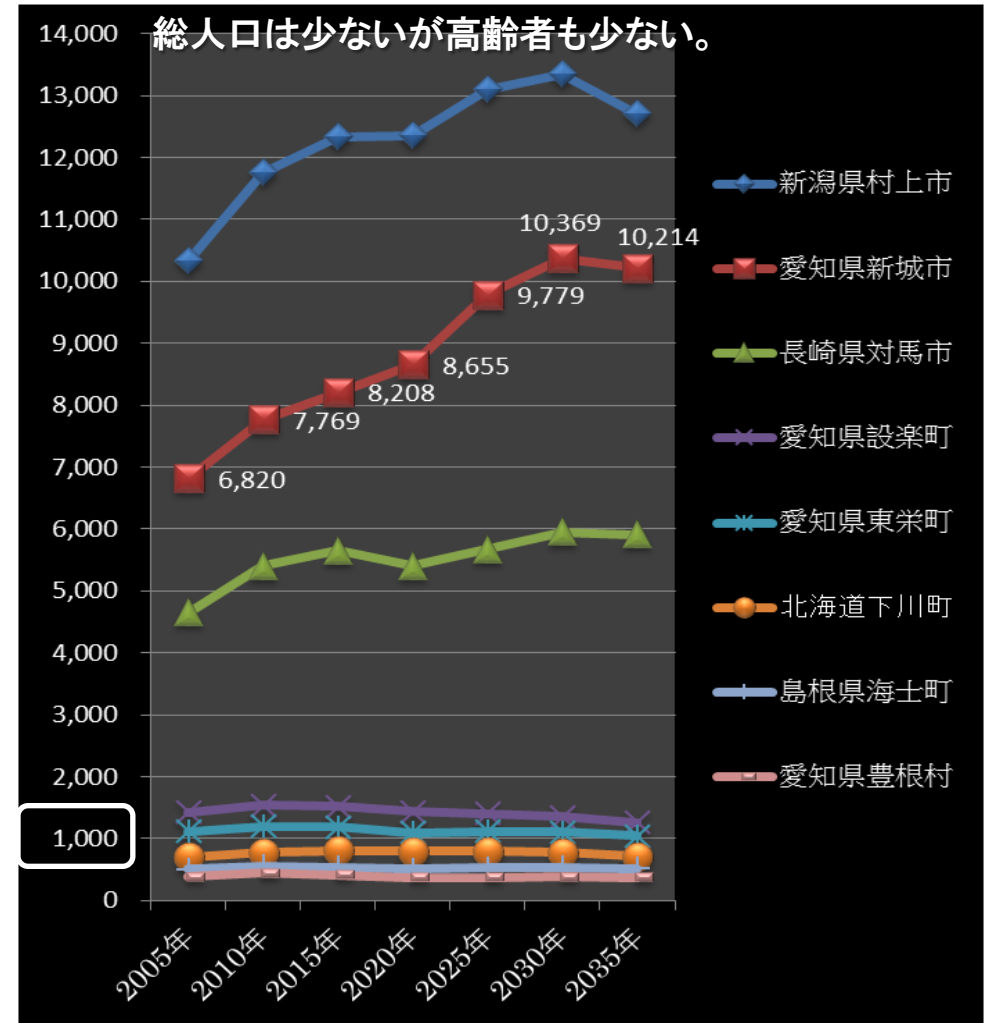
データソース: 国立社会保障・人口問題研究所 平成24年1月(出生中位・死亡中位)推計

75歳以上人口の推移

〔都市部の高齢化〕



〔農山漁村の高齢化〕



〔データソース：国立社会保障・人口問題研究所〕

日本に顕著な双子のリスク

どちらが、より困難な課題を抱えているのか

都市部における医療・
介護システムの崩壊

農山漁村地域における
生活基盤の消滅

人間力と地域力を掘り起こす

都市部の課題は
主として高齢化

- ・ 圧倒的多数の高齢者をケアするために、どれだけのヒト・モノ・カネを投入することができるのか？

高齢化は「率」ではなく「数」の問題！

農山漁村の課題
は主として人口減

- ・ 地域経済の衰退と生活基盤の消滅は、「人間力」と「地域力」で回避することができるのか？

イノベーションが期待される！

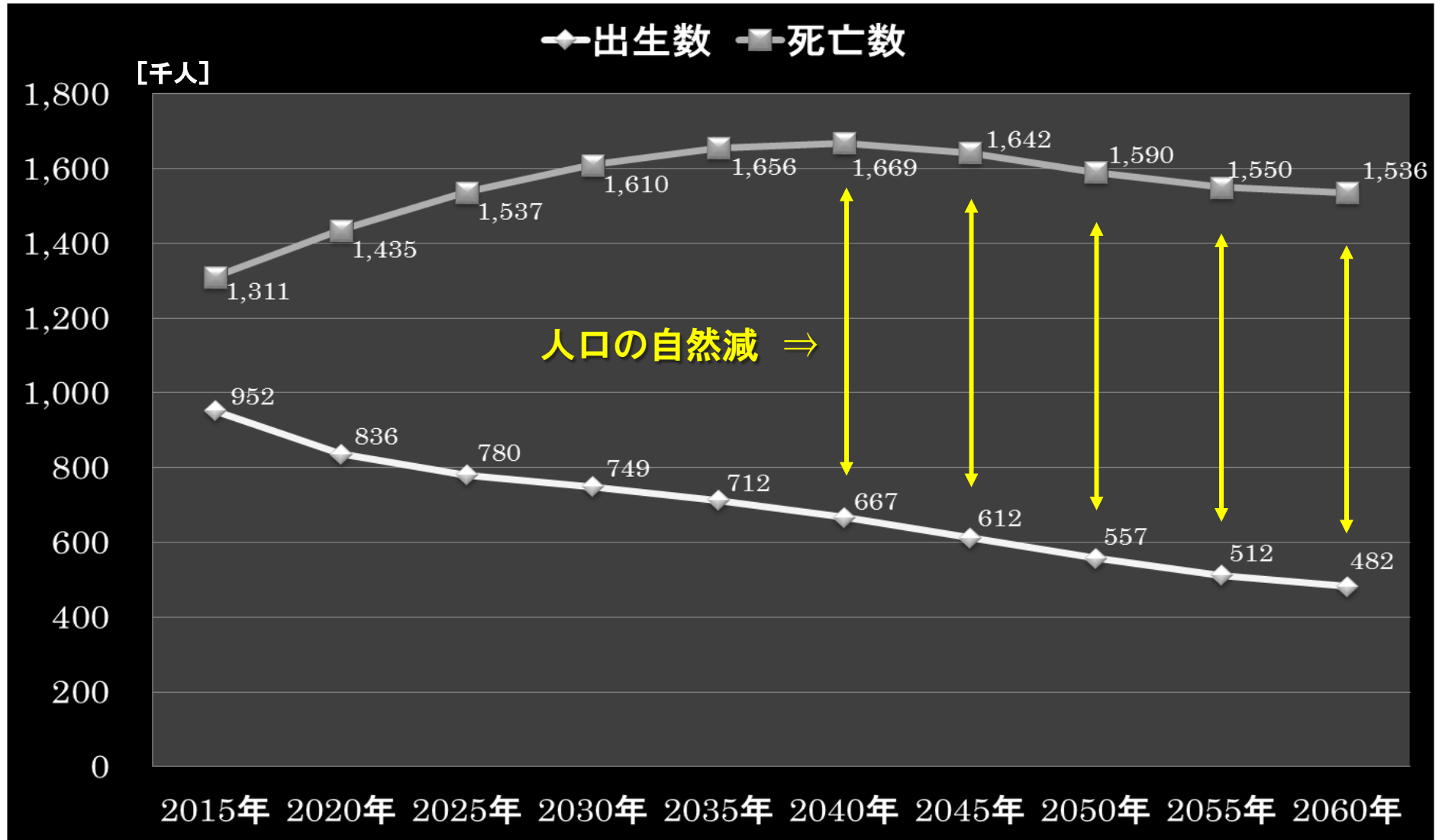
時代認識

日本社会の実態～高齢社会の本質

多死時代の幕開け

- ✓ 現実に関目を向けると、そこには日本社会を覆いはじめた深刻な問題が横たわっている。
- ✓ これから日本は本格的な多死時代に突入する。
- ✓ 平成24年版高齢社会白書では、2025年頃に年間死亡者数が150万人を超え、2040年前後には170万人近くの間人が1年間に死亡する、という推計データが示された。
- ✓ 出生者推計がほぼ予想通りの推移をたどるとしたら（ほぼ大幅な誤差はない）、これから年間100万人規模の人口減少がはじまる。

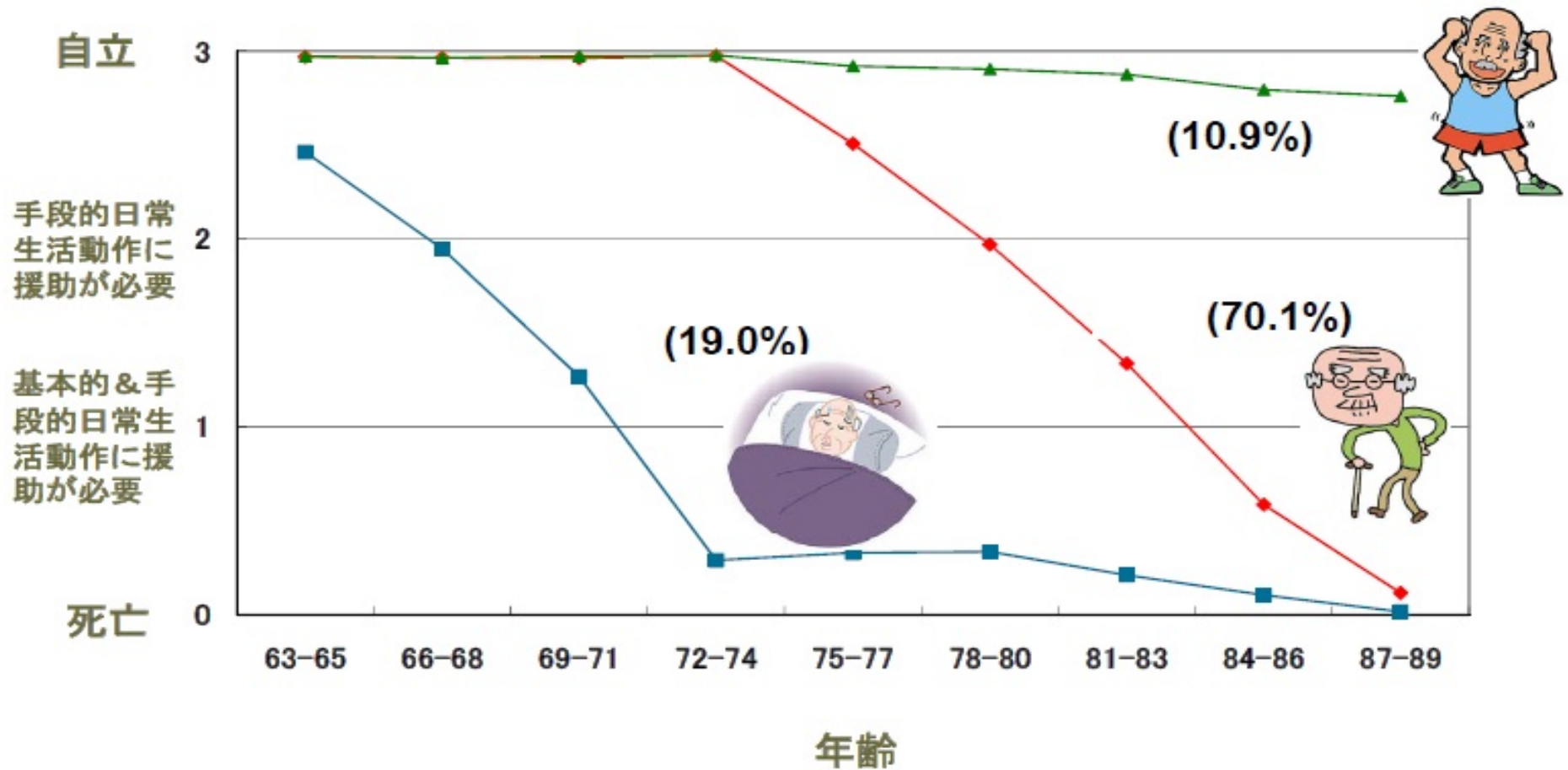
出生者及び死亡者の将来推計



[データソース:平成24年版高齢社会白書]

自立度の変化パターン 全国高齢者20年の追跡調査 (N=5715)

男性



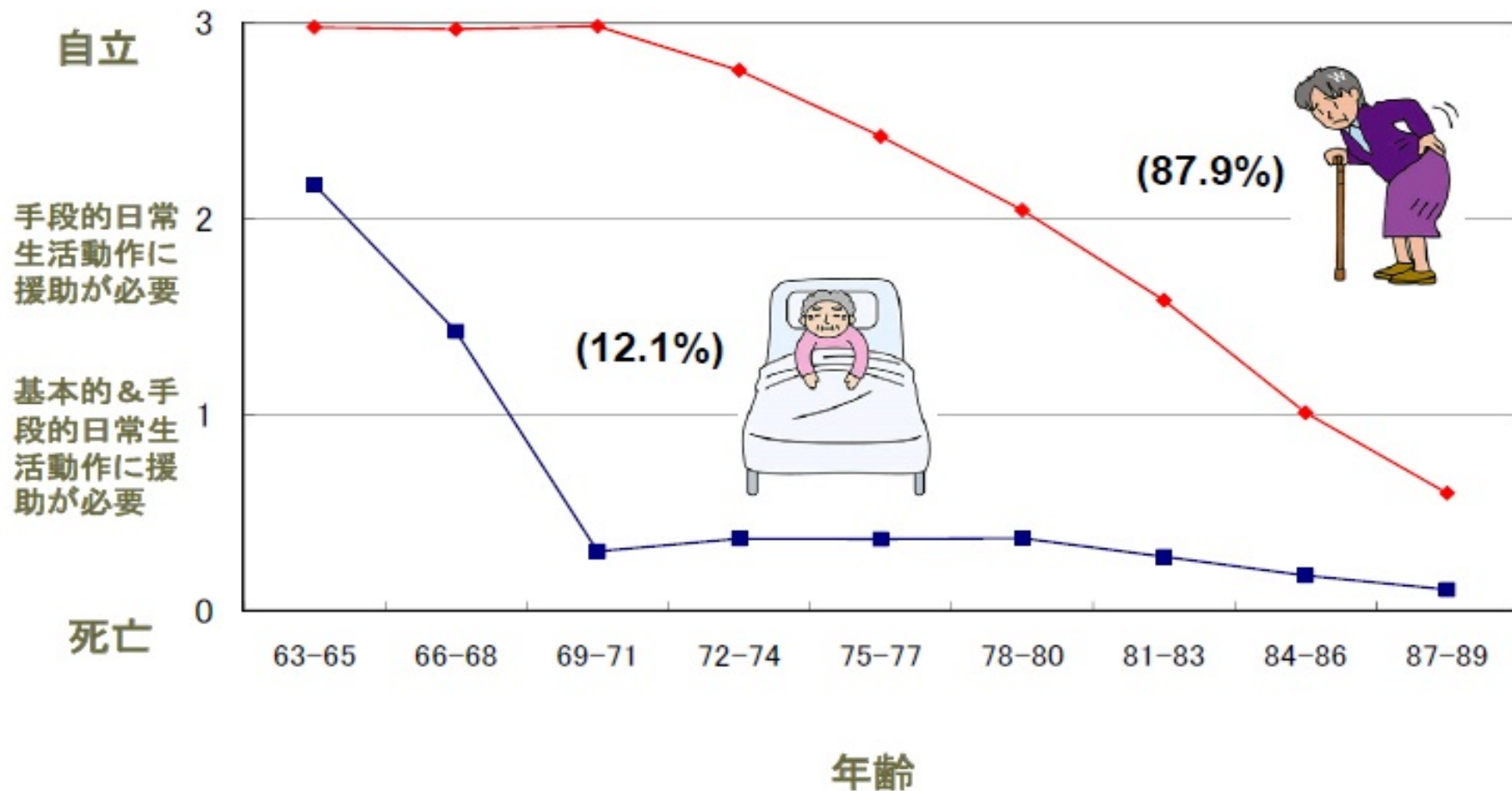
〔東京大学高齢社会総合研究機構 秋山弘子氏講演資料〕

出典) 秋山弘子 長寿時代の科学と社会の構想 『科学』 岩波書店, 2010

自立度の変化パターン

全国高齢者20年の追跡調査 (N=5715)

女性



【東京大学高齢社会総合研究機構 秋山弘子氏講演資料】
 出典) 秋山弘子 長寿時代の科学と社会の構想 『科学』 岩波書店, 2010
 これからの「まちづくり」

問われはじめた死生観

- ✓ 多死時代の扉はいま開かれたばかりだ。人口が減少しても社会の多死構造は変わらず、約50年後も大きな変化はない。
- ✓ 50年後といえば現在20代の人たちも高齢者になる。日本人はこれから数十年間に渡り多死の時代を、人口のウェートが高齢にシフトした社会を生きることになる。
- ✓ いまの混乱はまさに、新しい人口構造への移行期的混乱なのである。
- ✓ したがって、これは厚生労働行政や医療・介護現場だけの問題ではなく、**労働や産業のあり方を含めた、国民一人ひとりの人生観と死生観に関わる問題**である。
- ✓ そして何よりも、「地域力」というものがあらためて問われることになった、ということでもあるのだろう。公的サービスにすべてを委ね、生と死のリアリティを隠蔽してきた時代には、そろそろ終わりを告げなければならない。

市民協働へのアプローチ シェアという発想

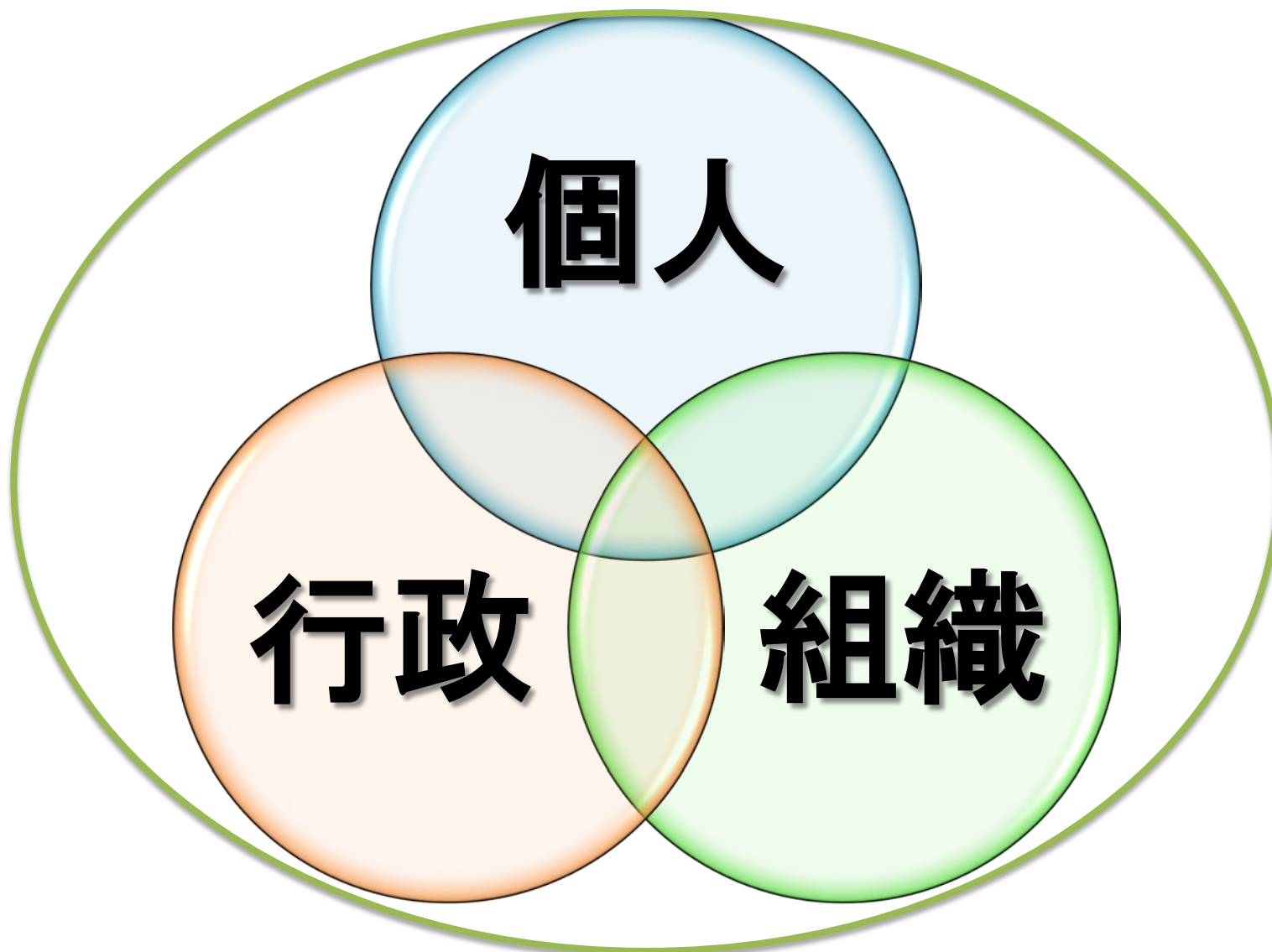
地域包括ケアの基盤

1. それぞれの地域に基本「モデル」というものはない。
2. そこには「共有された価値観」がある。
 - ✓ 「幸福とはなにか」を、住民どうしが相互主観的に感じ取っている
 - ✓ 等身大の生活世界で生きる～生活の小宇宙を感覚的に理解している
 - ✓ 一人の力ではできない仕事も力を合わせれば成し遂げられる、という相互認識がある
3. 危機感は思考を飛躍させる好機である。
 - ✓ 主我(I)の覚醒が創発(イノベーション)を生みだす
 - ✓ 飼いならされた思考から脱却する機会がある
 - ✓ 人間の野生を取り戻す～真の地域資源が見えてくる
4. 第一次産業を核とするCSV～地域資源を活用した共有価値の創造が地域ビジネスのキーワードにもなっている。
5. 地域の活性化には、まさに「百姓」(何でもこなす器用人)の精神と「祭り」(自他の境を超越する空間)が重要な役割を担う。

シェアという発想

- ✓ 「シェア」の概念は、コミュニティ経済あるいは相互扶助経済を構想するうえにおいても大切な要素になる。
- ✓ それはまた、少子高齢人口減少時代に突入する日本の未来の産業構造のあり方を考えるうえにおいても、ますます重要なキー概念となってくるだろう。
- ✓ 人口減少をともなう高齢社会では——たとえ技術革新が進展しようとも——以下の3つの理由により国内マーケットは縮小せざるを得ない。
 - 加齢による身体の衰えは人間の行動範囲を縮小する。
 - 収入の多くを年金に依存せざるを得ない状況では財布の紐も堅くなる。
 - 人間は誰も——あくまで一般論としてではあるが——加齢とともにエネルギー摂取量は減りモノへの執着も薄れていくため、日常の消費行動は鈍化する。
- ✓ したがって、これまでの企業戦略やマーケティング理論では解けない課題を産業界は抱えることになり、資本主義的な市場の限界に直面することになる。

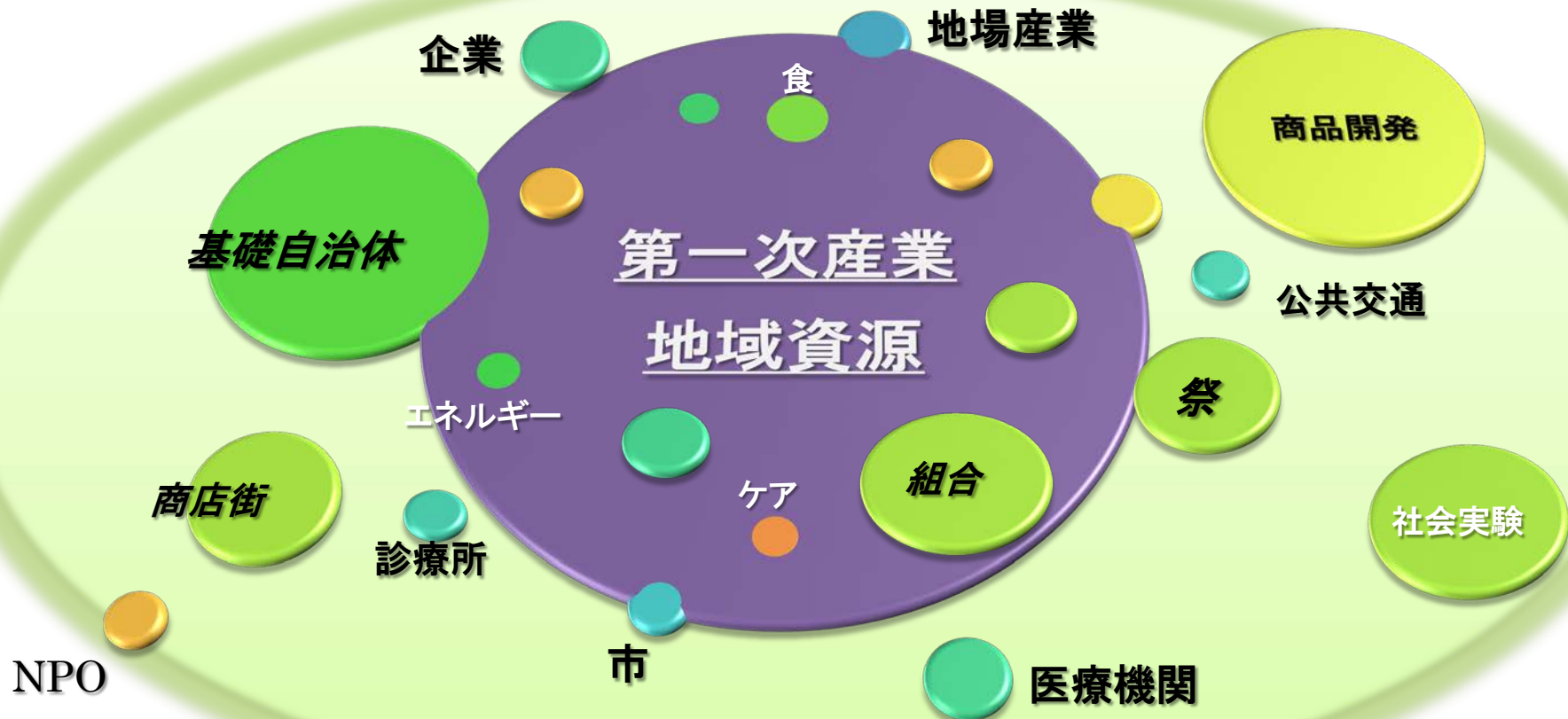
共有価値を創造する～多職種・多能種協働



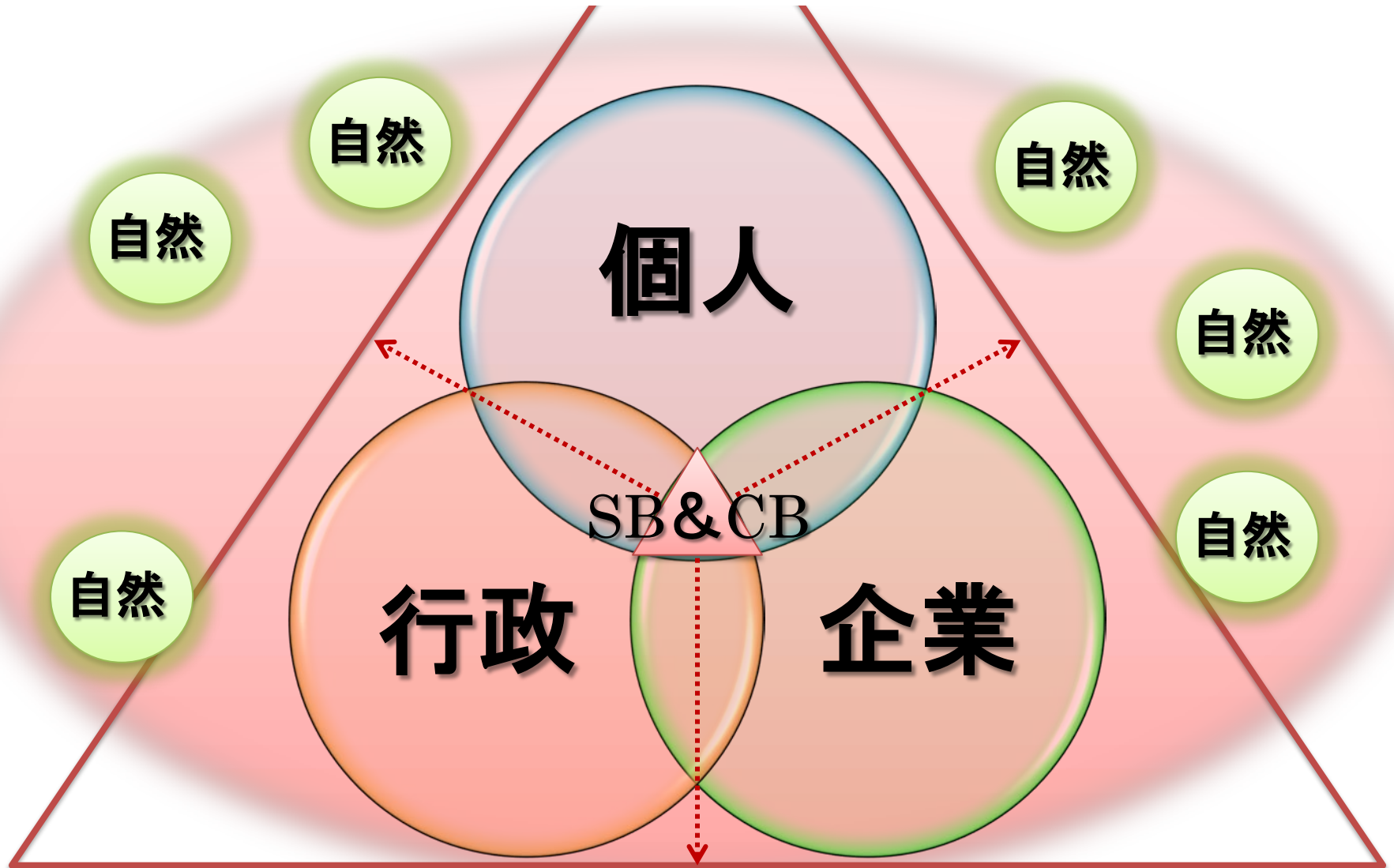
第一次産業を核とするCSV

[Creating Shared Value]

大切なことは共通の目的をもって協働できる地域基盤づくり
パートナーシップと住民ネットワークである。



「まちづくり」と結びの原理



市民協働へのアプローチ 働き方の変革

一億総活躍社会の実現には
「働き方」の变革をともなうが
それは
貨幣依存からの脱却でもある。

コラム：労働と自由

アウシュビッツ強制収容所の門には“Arbeit macht frei”（労働は自由をつくりだす）すなわち「働けば自由になる」という言葉が刻まれている。この場所で繰り広げられた凄惨な現実を知るならば、なんとも欺瞞に満ちたメッセージではないか。

しかしここで着目したいのは、“自由”を“労働”の対比概念として用いた、その深意である。なぜなら労働という「苦勞と困難」を耐え忍べば、その先には自由という「喜びと楽しみ」が待っている、というメッセージがこの文脈から伝わってくるからである。

なるほど労働の先に自由があるというキャッチフレーズは、悲しいかな現代社会を生きる多くの日本人にも違和感なく受け入れられるのかもしれない。経済合理性と等価交換のルールに従って、賃金を得るための活動のみを労働とするならば、たしかに労働はそれ以上の意味をもたない。したがって所得に直結しない仕事もまた、労働とは認められない。その果てに、誰もが最少の労働と最少の努力で、最大の利益を求めるようになる。

このような労働観は危険である。あくまでも主観的なものであるのだが、努力と成果の相関が崩れたとき、労働に対する強いマイナス・イメージが喚起され、労働からの逃避がはじまる。そこには労働に対する主体性の喪失がある。

[M.KAWAI 2016]

コラム：市場の論理の蔓延

自己利益追求という動機を内包した市場の論理の蔓延が“文化の危機”をもたらしていると感じたフランスの社会学者ピエール・ブルデューは、「人間であること、それは文化を身につけることである」と語り、「文化資本」なるものを想定した。

なかでも集団に固有の生活様式のようなもの、すなわち個人とその個人が所属する集団の内部に蓄積され、身体化された、感覚や価値認識や慣習などに着目し、それを「ハビトゥス」と名付けた。そして資本主義と対比させたのである。

現代の労働現場に漂う閉塞感の背景にあるのは、このような文化の喪失なのかもしれない。「働き方」もまた、社会の内部に深く埋め込まれた文化なのである。

[M.KAWAI 2016]

市民協働へのアプローチ

農の思想とケアの思想

～たとえば、アダム・スミスと農業

『国富論』第二篇第五章

- ✓ 等量の資本で、農業者の資本ほど多量の生産的労働を活動させるものはない。ここでは、労働する使用人ばかりか労働する家畜も、生産的労働者である。そのうえ、農業では、自然も人間とならんで労働する。そして、自然の労働にはなんの経費もかからないけれど、その生産物は、最も経費のかかる職人の生産物と同じように、価値をもつものである。農業の最も重要な機能は、自然の豊度を増すことであり、現にそのようなはたらきがなされてもいるけれど、それよりもむしろ、その豊度を人間に最も利益のある植物の生産へとふりむけるように意図することだと思われる。(中略)製造業では、自然はなにもしないで、人間が万事を行なう。そして再生産は、それをひきおこす諸要因の強さにつねに比例するにちがいない。したがって、農業に用いられる資本は、製造業に用いられるどんな等量の資本よりも、いっそう多量の生産的労働を活動させるばかりか、それが用いる生産的労働の量にたいする割合の点でも、その国の土地と労働の年々の生産物に、すなわちその国の住民の真の富と収入に、はるかに多くの価値を付加するのである。

➤ アダム・スミス(著), 大河内一男(監訳)(1978)『国富論 I』中公文庫, pp.568 - 569

農業とはなにか

- ✓ スミスの生きた18世紀のスコットランドやイングランドにおいては、農業の大切さは自明のことであったのだろう。しかし重商主義の拡大はこれを浸食しはじめていた。
- ✓ スミスは『国富論』の冒頭で「必需品と便益品こそが国民の富」と語り、それを“食”・“衣”・“住”の順で強調している。
- ✓ スミスは当時のヨーロッパ近代国家の動き——すなわち富と価値を混同した歯止めのない自由貿易論——に警鐘を鳴らしたかったのではないか。
- ✓ いずれにしてもスミスが、「**生きた自然**」と「**死んだ自然**」、「**有機的生産**」と「**機械的生産**」を明確に切り離して捉えていたことに疑いはないだろう。
- ✓ しかし、このような一見すると歯切れの悪いスミスの農業に対する見解は、フランソワ・ケネー(François Quesnay)譲りの重農主義の残像として、経済学から捨象されてしまった。
- ✓ アダム・スミスの経済思想を——現代という時代に重ね合わせて——再考してみることは、日本の未来を考えるうえにおいても、とても大切なことではないだろうか。

人間は自然の生命循環の中にある

- ✓ そもそも農業は、それ自体がエコシステムである。太陽エネルギーを取り込んだ植物は、人間を含む動物に摂取されてエネルギー変換を遂げ、さらに動物の排せつ物が微生物にエネルギーを提供して土壌を豊かにする。まさに人間は生態系と食物連鎖のなかに身を置きながら生命系の経済を稼働させる役割を担っていると言ってもいい。なかでも農業者は、自然エネルギーを人間にとって有用なものに変換する技術を持っている。
- ✓ また、日本人と農業には西欧社会とは異なる独特の関係性や世界観を見出すことができる。そこにはアニミズムが深く関与しているようにも思える。自然すなわち太陽と水と大地に宿る神霊の存在を、農民は日々の暮らしのなかに感じとっていたのではないかと思うのである。
- ✓ たとえば鈴木大拙の『日本的霊性』には以下のような一節がある。「人間は大地において自然と人間との交錯を経験する。人間はその力を大地に加えて農産物の収穫に努める。大地は人間の力に応じてこれを助ける。人間の力に誠がなければ大地は協力せぬ。誠が深ければ深いだけ大地はこれを助ける」というものである。

幸福とリスクを分かち合う社会

～社会とどう向き合うのか～

- ✓ 少なくともこれからの半世紀は、リスクを吸収できる社会を創造していかなければならないのではないかと思う。
- ✓ 誰もが意識的な生き方を志向し、与えられるものを無意識に享受するのではなく、生活に必要なものを自分たちでつくり上げ、そのシステムを協同で維持していく取り組みである。
- ✓ 安全で安心な食が生産され、再生産されるシステムを、消費者もみずから参加してつくりあげること(食)。
- ✓ 疾病や障害あるいは窮乏という生活リスクを軽減するために、生活者がみずから参加して、そのシステムを健全に維持していくこと(ケア)。
- ✓ どちらも主体的で自律的な社会システムである。



社会を再考する

ルーマンの社会システム理論

～春日淳一教授によるルーマン貨幣論を手掛かりに～

ルーマンの社会システム理論

- ✓ ニクラス・ルーマンは、オートポイエーシス概念をすべての組織体に共通する組織原理として定式化を試みる。
 - 各構成部分は、自らの相互作用と変換によって、自らが産み出した関係性のネットワークを新たに発生させ機能させる。
 - 各構成部分は、このような活動が実現される位相的領域をネットワークの内部で規定することによって、このネットワークを空間における一つの具体的な統一体として構成する。
 - オートポイエーシス的システムは、自らを存続させる構成要素や構成部分を、自ら生産し制作する。つまり、各構成要素が一つの循環過程のなかで相互に作用しあい、システム維持のための構成要素が不断に産み出される。

オートポイエーシスのシステム

- ✓ オートポイエーシスのシステムは、自己生産的および自己準拠的に作動する。
 - それは、自らが産み出した結果をさらなる活動（展開）の基礎として不断に用いる再生産過程であり、回帰性の概念を内包している。

コミュニケーション・メディアとしての貨幣

- ✓ 社会は独特な作動様式をもつシステムである。
- ✓ 貨幣はもろもろの社会メディアの一つである。
- ✓ これまで経済の舞台で独り芝居を演じていた貨幣が、社会という大舞台では他の役者と競演あるいは共演することになった。
- ✓ 貨幣は支払いに備えられる。そこには不特定ながら支払う相手が想定されている。
- ✓ ゆえに貨幣は他者との接触を前提にして意味を持ち、他者との接触のないところでは存在意義を失う。

貨幣は象徴的に一般化したメディア

- ✓ 貨幣は「支払い」というコミュニケーションを媒介するメディアである。
 - 「他者との接触」＝「コミュニケーション」
 - 「貨幣の機能」＝「コミュニケーションの媒介」
- ✓ さらにルーマンは以下のようなタイプ分けを行う。
 - 「言語」＝コミュニケーションに際して理解を助けるメディア
 - 「貨幣・権力・真理性」＝コミュニケーションの成果を確実なものにするためのメディア
 - 後者を「象徴的に一般化したメディア」と呼ぶ

ルーマン社会システムの再確認

- ✓ 自分を絶えず他のものから区別することによってある種の「まとまり」を保っているような対象を「システム」と呼ぶ。
- ✓ ルーマンは社会システムを、「コミュニケーションが次々と新たなコミュニケーションを生み出していく、その自己再生産の総体である」とした。
- ✓ 社会をコミュニケーションの自己再生産と捉えることで、**人間は社会システムの部分ではなく環境となる。**
- ✓ すなわちシステムの基本要素を「人間」や「行為」ではなく「コミュニケーション」としたことで、社会システムは、要素を自己再生産し、それを通じて自らを維持し続ける「自己準拠的」で「自己生産的」なシステムであるとした。

象徴的に一般化したメディアの機能

- ✓ ルーマンにとって社会システムはオートポイエーシスである。
- ✓ この社会システムのオートポイエーシスをもっともわかりやすく示しているのが「支払い」の場面である。
- ✓ ルーマンは、貨幣の支払い(貨幣メディア)によって形成される部分システムを「**経済**」と呼ぶ。
- ✓ 同様に、権力メディアによって形成される部分システムを「**政治**」と呼び、真理性メディアによって形成される部分システムを「**学問**」と呼ぶ。
- ✓ 現代社会は貨幣メディアが高度に発達したことにより、それ自体が全体社会から機能的に分化し、オートポイエーティク・システムになっている。

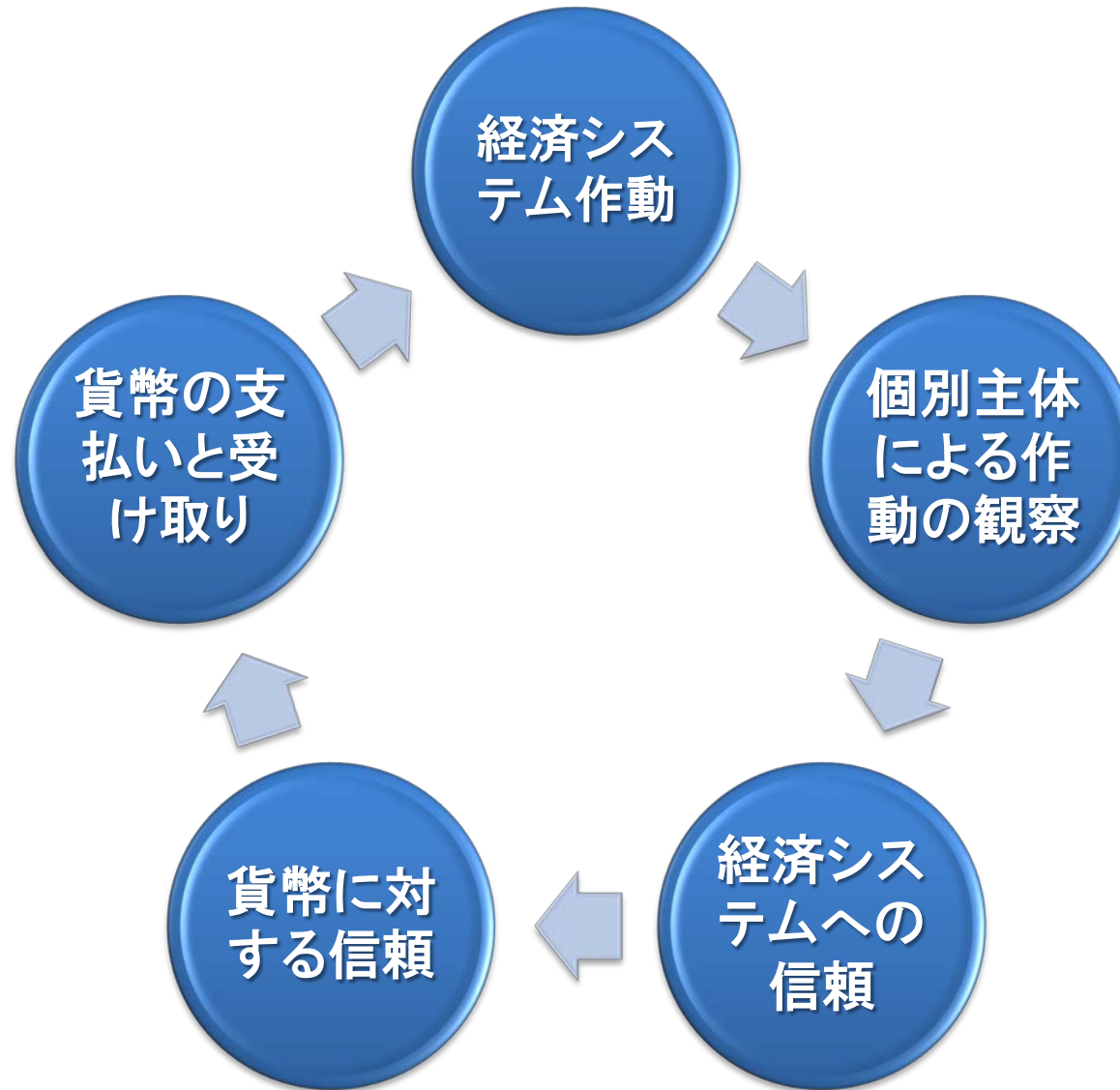
経済のオートポイエーシス

- ✓ 貨幣は支払人と受取人の両者を前提にはじめて意味を持つ道具である。
- ✓ 貨幣のオペレーション機能に着目すれば、貨幣の受け取りは次々と新たな受け取りを生み出し、それは支払からスタートして次々と新たな支払いを生み出すことでもある。
- ✓ 支払いと受け取りは経済に特有のコミュニケーションである。
- ✓ すなわちコミュニケーションがコミュニケーションを生み出す社会システムのオートポイエーシスが、社会の部分システムである経済システムにおいて起こっているといえる。

オートポイエーシスの定義(再考)

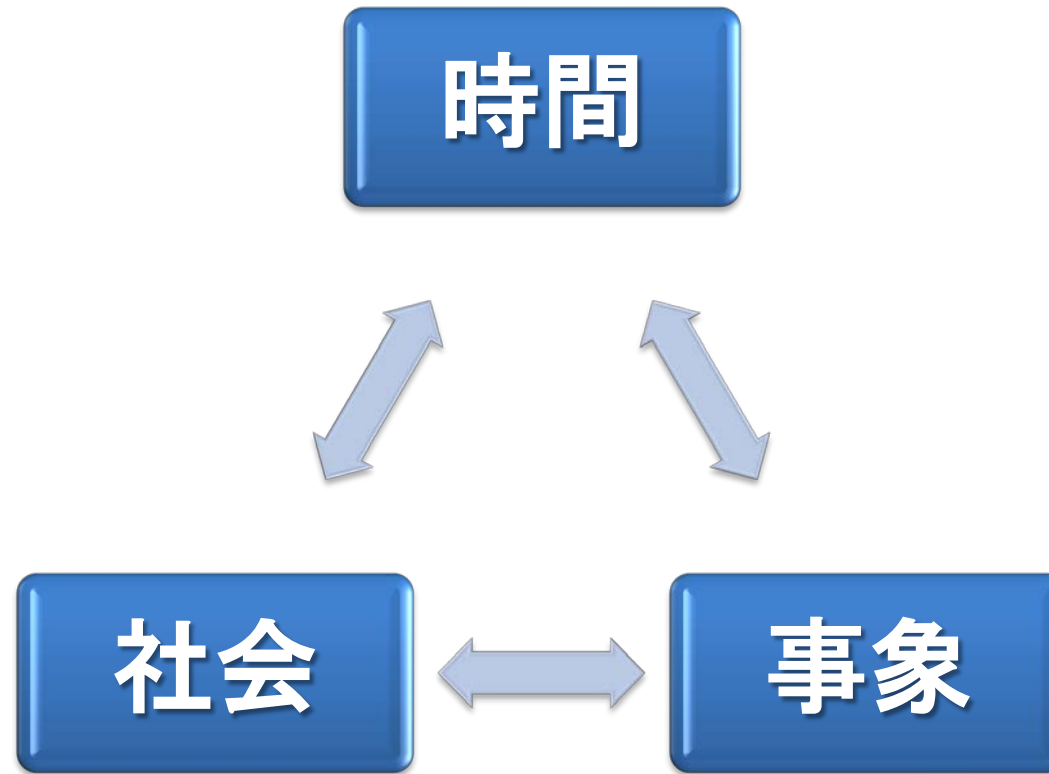
- ✓ 一般定義:「要素を自己再生産し、それを通じて自らを維持し続ける働き」
- ✓ 自己準拠的とは、「自分で自分を」や「自分で自分に」という関係である。
- ✓ ルーマンによる自己準拠の三相(or三層)
 - 規定的自己準拠・・・システムを構成している要素を、要素自らの手によって生み出す(経済システムにおける例:支払いが次々と新たな支払いを生み出す)。
 - 過程的自己準拠・・・たとえば会話の場合、同時進行の会話はなく、すでに行われた会話について会話するか、これから行われる会話について会話することになる。これを経済システムに当てはめると、過去に受けた融資の返済あるいは利子の支払いや、将来の利子の受け取りを条件とする融資の契約などがあり、また、保険料の支払いと保険金の受け取り、宝くじなどのように、安心や夢の売り買いという、純粋な支払いに対する支払いとはいえないものをいう。したがって典型例は「金融」である。
 - 再帰・内省・・・自分自身を観察し、自己観察の過程でつねにその自己観察に反応すること。これを経済システムに当てはめると、多数の経済主体(自己・個人)が、自分たちにとって環境である経済システムを、それぞれの関心に基づいて観察することである。この場合、各経済主体の関心が異なっても、経済主体は貨幣を用いて取引を行う主体なので、そのかぎりでは、自己再生産は持続するものとみなされる。その背景には「貨幣に対する信頼」があり、それは経済システムに対する信頼と表裏一体になっている。こうしたシステム信頼は、貨幣を使用する過程で絶えず確証を繰り返すという「経験」を通じておのずと築き上げられたもの。経済システムは、「自らが作動し続ける」という確証を自己観察に求め、それに反応して自ら作動し続ける」という「再帰・内省」の形態をもつ。

経済システムにおける再帰と内省



象徴的一般化の三つの次元

- ✓ 貨幣は「象徴的に一般化したメディア」である。
 - ルーマンによる象徴的一般化の三つの次元



貨幣の象徴的一般化作用

- ✓ 貨幣の一般化については以下のようなになる。
 - 貨幣は現在のみならず未来における任意の時点で支払いに用いることができる。
 - 取り引きする財やサービスの質・量・属性にかかわらず使用することができる。
 - 使用にあたって相手の人格や動機が問われることはない。
 - いずれも、異なるもの、分離したもの、をひとつに結び付ける働きをする。
- ✓ 貨幣は、「異なる時間」、「異なる財やサービス」、「異なる動機や利害」、「異なる人格」を超えて取引を成立させる仲介者となる。
- ✓ この「ひとつに結び付ける」作用をもって「象徴的」と表現している。

貨幣の二面性

悪魔的

ひとつだったものに
違いを作り出し分離
させる働き

象徴的

「異なるもの」「分離
したもの」をひとつ
に結び付ける働き

ストーリーとヒストリーの喪失

- ✓ 現代の市場は後ろを振り返ることなく、加速度的に前進し、また競争原理が取り入れられていることで、競争相手とコミュニケーションを取る動機もほとんど起こらない。
- ✓ 売り手や買い手も、義理や人情に引きずられたり歴史への思い出に浸ったりすることもなく、ただ前だけを向いて走り続ける。
- ✓ 書店から良書が消えようと、自然景観が破壊されようと、社会から職人芸が消えようと、そんなことは彼らの眼には映らない。
- ✓ なにゆえ迷うことなく走り続けることができるのか、それは**貨幣がすべての記憶を消してくれる**からである。
- ✓ 貨幣は、使途や目的や由来の痕跡を残さない。貨幣の持つ支払いの不可逆性が、人々を終わりのない前進に掻き立てているのである。
- ✓ 忘れてはいけない大切な事実、**加速度的に前進運動を続けるのは市場経済の宿命なのであって、それは人間の宿命ではない**ということである。

社会を再考する

貨幣と労働

～複雑性減縮メカニズムの発動

労働の「黒衣」化

- ✓ 労働は(経済システムから)排除されつつも包摂されている第三者(舞台の黒子)である(N. Luhmann)。
- ✓ 分業と、それを可能にする交換手段としての貨幣は、現代社会にとって、もはやなくてはならないものになっている。
- ✓ 希少性問題の調停役として貨幣が表舞台に上がったことで、労働は黒子として陰に隠れる格好になった。しかしながら、労働は依然として希少性問題の究極的な答えであり続けている。
- ✓ 補足(注): ルーマンは、労働を経済システムの主役の座から降ろしたのではなく、そもそも労働は経済システムの内部に組み込まれたものではない、と理解すべきであると主張する。
- ✓ 労働システム(分業システム)は、それ自体がオートポイエーティックに作動する全体社会の機能的な部分システムとして、経済システムと並立する。

労働システムと経済システムの対比

【時間的一般化】

- ✓ 貨幣の場合、貨幣に対する信頼が貨幣に対する信頼を生む、という自己準拠性を持ち、その信頼が失われる可能性は低い。
- ✓ 言語については、信認の範囲は限定的であり、ある意味では移ろいやすいが、緩やかに変化しながら一般化レベルを維持しているといえる。
- ✓ 労働の場合、技術進歩や社会の急激な変化が生じない安定期は比較的に一般化したメディアであり得るが、**変化スピードが上がれば一般化レベルが下がる**というパラドクスを生じる。※高齢社会ではより顕著になる？

労働システムと経済システムの対比

【事象的一般化】

- ✓ 貨幣は価格を通して財の価値を表現し、言語はその集合によって意味を定義する。そこで労働については、労働メディアが労働システム内で用いられる限りにおいて、労働が人びとの間の**相互依存の関係**を作り出すのであれば、労働は事象的に一般化したコミュニケーション・メディアとしての地位を獲得する。
- ✓ したがって、労働について**人びとが互いに助け合う活動**を意味すると解される限りにおいて、すべての相互依存は労働ないし仕事によって表現され得るといえる。
- ✓ ここで、貨幣メディアにおける「**財**」、言語メディアにおける「**意味**」と同様に、労働メディアについては「**互助・互恵(相互依存)**」というカテゴリーが当てられる。
- ✓ 「助け合い」はすべて労働によって表現され、それはコミュニケーションを媒介として作動するので、労働は事象的に一般化したコミュニケーション・メディアといえる。
- ✓ また、貨幣において「財に対して支払われるべき貨幣量」を「**価格**」といい、言語において「意味に対してあてられるべき語なし語の配列」を「**定義**」としたが、労働において「助け合いにおいて行われるべき労働ないし仕事」には「**役割**」が適している。

労働システムと経済システムの対比

【社会的一般化】

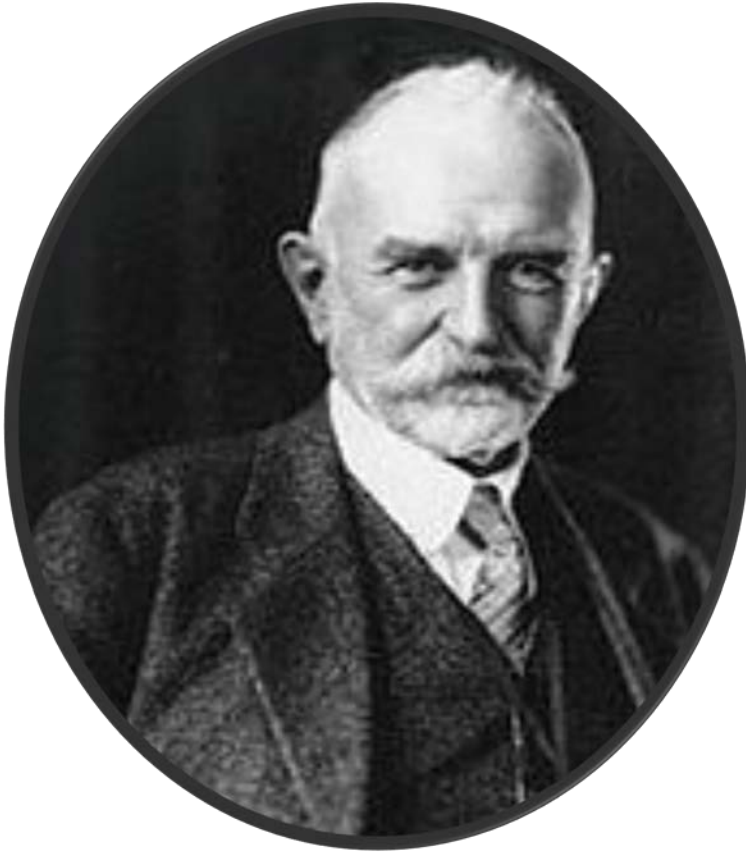
- ✓ 労働の社会的一般化は基本的に難しい。なぜなら、労働は働き手となる人間から切り離すことができず、また、その労働が誰との間の助け合いにも使える、ということが前提になるからである。
- ✓ 私見的考察：その意味では、労働を取り巻く世界が広がれば広がるほど、労働の社会的一般化が困難になると考えられる。労働は本来、地域限定的なものである。
- ✓ しかしながら、経済的分業が発達したことから、現代社会では貨幣支払いというインセンティブによって社会的一般化が(表面的に)実現されている。
- ✓ 注視すべきは、労働と貨幣が結びつくのは社会的次元においてのみであるということで、これは社会経済的進化における偶発的なものである。アダム・スミスが『諸国民の富』において、労働ならびに分業を貨幣経済ないし市場経済と一体と見たのも、この偶発的な出来事を必然と読んだからに他ならない。

文化を更新する プラグマティックな思考

ミードとデューイ

ジョージ・ハーバート・ミード

(George Herbert Mead, 1863.2.27～1931.4.26)



ジョン・デューイ

(John Dewey, 1859.10.20～1952.6.1)



文化を更新する 社会的行動主義

ミードのプラグマティズム

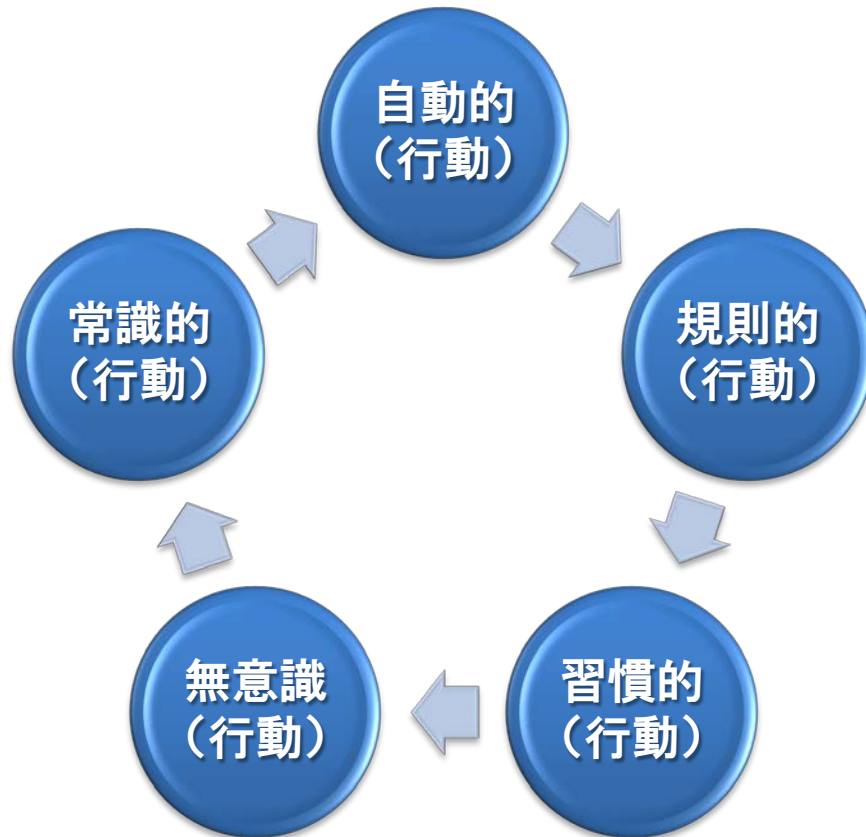
- ✓ ミードは、ウィリアム・ジェームズの影響を受けたプラグマティストであるが、コミュニケーション論や自我論においてユニークな思想を展開し、社会心理学の領域において著名な研究者である。
- ✓ ミードのプラグマティズムは以下の2つを特徴とする。
 - 社会的行動主義心理学を提唱する
 - 科学的方法を用いる
- ✓ 実験によって観察できる外部的な行動のみを心理学の対象としてきたこれまでの行動主義心理学を批判し、心や意識の役割に着目しながら、コミュニケーションと社会的な行動によって個人の意識が形成されるとした。

社会的行動主義心理学

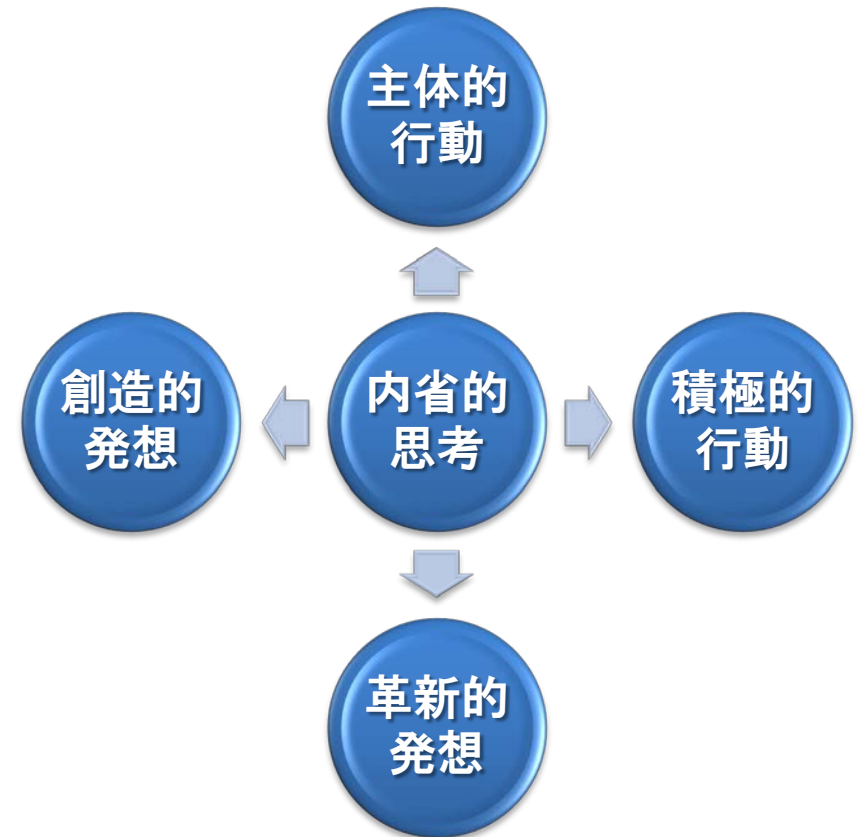
- ✓ 社会的行動主義心理学は、他者が観察しうる行為、という観点から人間の「経験」を解明しようという試みである。
- ✓ 外部から内部へのアプローチ、すなわちコミュニケーションを媒介する「意味のあるシンボル」の存在を確認し、それを介して行われるコミュニケーションによって、それらが自己の心的システム（意識）に作用する過程を明らかにしようとする。
- ✓ ミードは、人間の心的世界が形成される過程を、行為との関係において把握することができると考えた。
- ✓ これが社会行動主義といわれる所以であり、ミードがプラグマティズムによって、独自の社会心理学を展開しようとしている証でもある。

内省的思考と仮説形成

日常における内的世界



問題に直面した内的世界



内省的思考と知性の役割

- ✓ ミードは、進化論が内包している概念を、行為と意識という側面からプラグマティズムに組み込み、再編成を試みたのである。
- ✓ 人間は社会的行為によって環境に適応し、その連続性が保たれる限りにおいて、社会進化や社会の発展がある、と考えた。
- ✓ ミードは、内省的思考と知性の役割をジョン・デューイから学んだ。それは、人間は問題的状况に直面すると内省的知性を発揮し、問題を解決するための仮説を形成する。それを行動(行為)によって検証し、新しい法則を導き出していくものである、ということを、である(内省的意識の弁証法)。
- ✓ またミードは、道徳的意識(内省的意識)と道徳的環境の関係性を強調している。道徳的コミュニティは道徳的意識を生み出し、また、道徳的意識は道徳的コミュニティにおける対立や葛藤を調停し、再創造するとしている。

ミードにおける真理

- ✓ ミードは、真理は現実世界(リアリティ)にある、としている。すなわち、思考(意識)は行為(行動)を継続させるが、その過程において思考(意識)における真理が生み出されると考えている。
- ✓ ミードにおいて、唯一絶対の真理はなく、現実世界では数多くの真理が存在してもいい——あるいは当然存在する——と考えている。それは、ミードが主張する真理は“問題の解決”と同義であるからである。その意味においても、ミードの哲学はプラグマティズムである。

ミードの人間観と二元論の超克

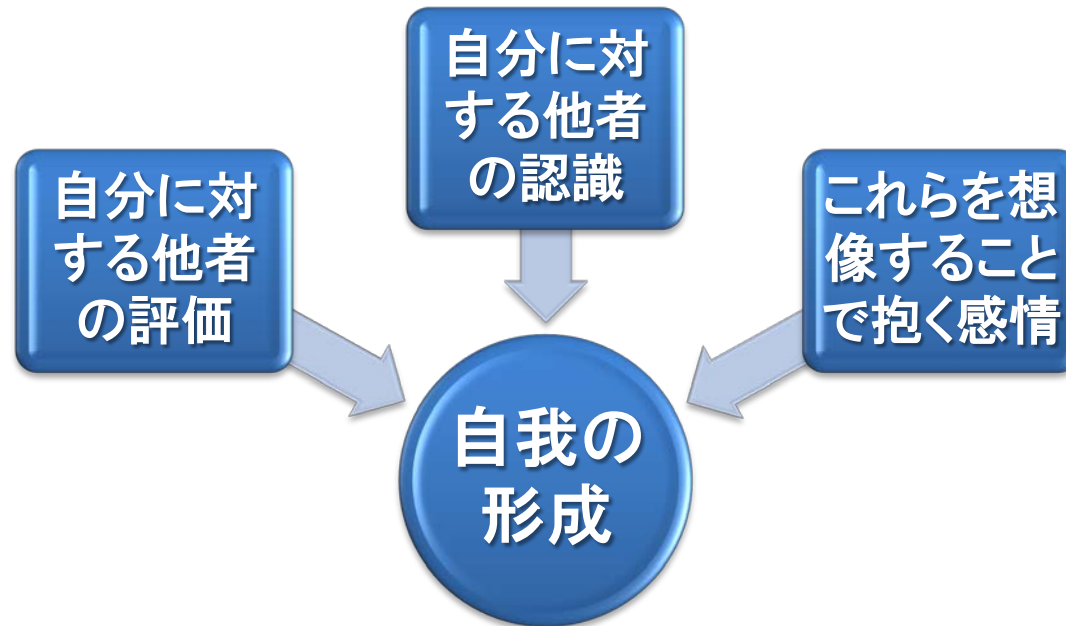
- ✓ ミードは、人間は、創造的な存在としての横顔と社会的な存在としての横顔の、二つの表情をもっているとする。
 - つねに問題とぶつかり、それを解決していこうとする、個人的で創造的な側面
 - 他者とかかわり、他者と協同して生きていこうとする、集合的で社会的な側面
- ✓ ミードは、したがって、人間は社会的であり、問題解決型の自己意識的個人であり、シンボリックな存在として認識していた。
- ✓ プラグマティズムはそもそも、有意味ではない二元論の克服を課題としてきた哲学である。そこでミードもまた、観念の解明を、論理構造ではなく、問題解決に向かう思考と行為の分析に向けた。

ミードによる社会的自我論の展開

- ✓ 「我思う、ゆえに我あり」という言葉で自我の定式化をしたルネ・デカルト(René Descartes, 1596.3.31～1650.2.11)の自我論は、「自我の孤立説」といわれる。
- ✓ それに対し、ミードは「自我の社会説」を唱える。
 - 自我は生理学的有機体それ自体とは異なる性質をもっている。自我は発達するものである。それは生まれたときから、もともと、そこにあるのではなく、社会的経験と社会的活動の過程において生じてくるものである。つまり、一定の個人において社会過程全体との、そしてその過程内の他の個人との関係の結果として発達してくるものである(G. H. Mead)。
- ✓ ミードは、社会的自我論を形成する過程で、チャールズ・ホートン・クーリー(Charles Horton Cooley, 1864～1929)による自我の概念から——批判すべき点はあるものの——多くの示唆を得ている。

クーリーの「鏡に映った自我」

- ✓ 人間は自分の姿や顔の全体を、自分の視覚をもって確認することはできないが、それは鏡に映すことによって知ることができる。それと同様に、人間の自我を映し出すのは他者であり、他者を鏡として自我を知ることができる。
- ✓ したがって、家族、友人、上司、同僚、あるいは教師といった他者が、自分のことをどのように見ているか、あるいは自分をどのように評価しているかが、自我の形成と深くかかわっている。



他者の役割取得

- ✓ 他者の役割取得によって形成される自我
 - 人間が自分自身に対して対象となるのは、まさに、自分の行為にかかわる他者の態度を取得する自分自身に気づくからである。人間が自分自身に立ち戻ることができるのは他者の役割を取得することによってだけである(G. H. Mead)。
- ✓ 他者の役割取得においては、「意味のある他者」の存在が重要である。「意味のある他者」は人間の成長に伴って変化する。子どもの頃は主として母親であり、次いで身近な親族へと移行し、いずれ友人やクラスメート、先輩や教師と広がっていく。
- ✓ それは社会の変化によっても影響を受ける。今日においてはメディアも「意味のある他者」の役割を演じ、多くの人々とのかかわりのなかで、自我は多種多様な期待に直面する。

文化を更新する
教育の意味と方法を考える

ジョン・デューイの思想

- ✓ ジョン・デューイは教育学者として著名であるが、じつは代表的なプラグマティストでもある。
- ✓ デューイが“教育”というフィルターを用いるのは、教育による伝達の結果として社会は維持されている、という認識のもとで、子どもたちに文化を伝えていくとともに、新しい文化を創造する力、社会をつくり直していくことのできる力も身につけさせること、教育はそれを実践するための道具と考えるからである。
- ✓ パースやジェームズらのプラグマティズムを受け継ぐジョン・デューイは、その著書『民主主義と教育』のなかで次のように述べている。

経験主義の哲学

- ✓「一般的に、人間を含めて、生命をもつ有機体が生きていくということは、その有機体が、自分を取り巻く環境に対して働きかける行動によって、自分をつねにあらたにつくりかえていく過程のことをさしているのである。ところが、人間の場合では、自分をつくりかえるということは、肉体を更新していくことであると同時に、それは信仰や理想や希望や幸福や悲しみ、そのほかの風俗習慣の更新をも含んでいる。つまり、人間は社会的な様々の経験を更新することによって、その経験をじつは持続させていくのである」

デューイにおける学校と社会

- ✓ デューイが目指したのは、典型的な仕事を体感することによって社会を理解すること、それは学校を小型の共同体、胎芽的な社会とすることである。
- ✓ 知性的な思考と行動の仕方を学び、その能力を特定の環境のなかで育み、仲間たちと協同で、また協力しながら推進していく能力、そして、そのためのコミュニケーション・スキルを身につけることが目的である。
- ✓ デューイは、社会とは「共通の進路にしたがい、共通の精神と共通の目的に関わって働いているがゆえに、結合されている、一定の人々からなるものである」といっている。
- ✓ 共通の目標に向かって進み、協同あるいは協働して事を進め、主体的に参加するという民主主義社会の成員となること、デューイにとって、そのような活動が行われている場が「社会」であり「共同体」であった。

創造的想像力の源泉となる教育

- ✓ デューイの教育の中心には、オキュペイション(仕事)が内包している想像力を育む機能への期待があった。
- ✓ デューイにおける仕事は、厄介で、忍耐を要する、ただ結果を得るためだけの単なる手段にすぎないような活動ではもちろんなく、また、狭い功利主義的な労働でもない。
- ✓ これについてデューイは以下のように述べる。
 - 学校で追求される典型的なオキュペイションは、いつさいの経済的圧迫から解放されている。その主眼とする目的は、生産物の経済的価値にではなしに、このような狭い功利的なものからの解放、このような人間精神の発達可能性に対する開かれた態度こそが、学校におけるこれらの実践的活動を**芸術の盟友**とし、また、**科学と歴史を学ぶ起点**とするのである(J. Dewey)。

デューイの教育哲学

- ✓ 形式にしばられた教育の現場は、つねに受動的になり、個性を伸ばし、感性を育むことが阻害されがちになる。そして想像力や創造性は抑圧され、行動への柔軟性が失われて機械的なものになってしまう。それでは変動する社会変化に敏感に対応していくことができない。
- ✓ そもそも哲学が目指すものとは、**公共性のある問題の解決策を行動レベルで明確にすること**である。
- ✓ 公共性のある問題とは、現実社会における解決されなければならない問題であって、哲学は、その解決のための論理と方法を明確にすることであり、それこそが役割であると認識すべきである。
- ✓ 経験に学び、知性を高め、それらを正しい方法で活かし、主体的な行動に移すことができれば、現実社会における問題のすべては、かならず人間が自らの力で解決することができる。

失われた文明

『逝きし日の面影』から見えてくるもの

『逝きし世の面影』という作品

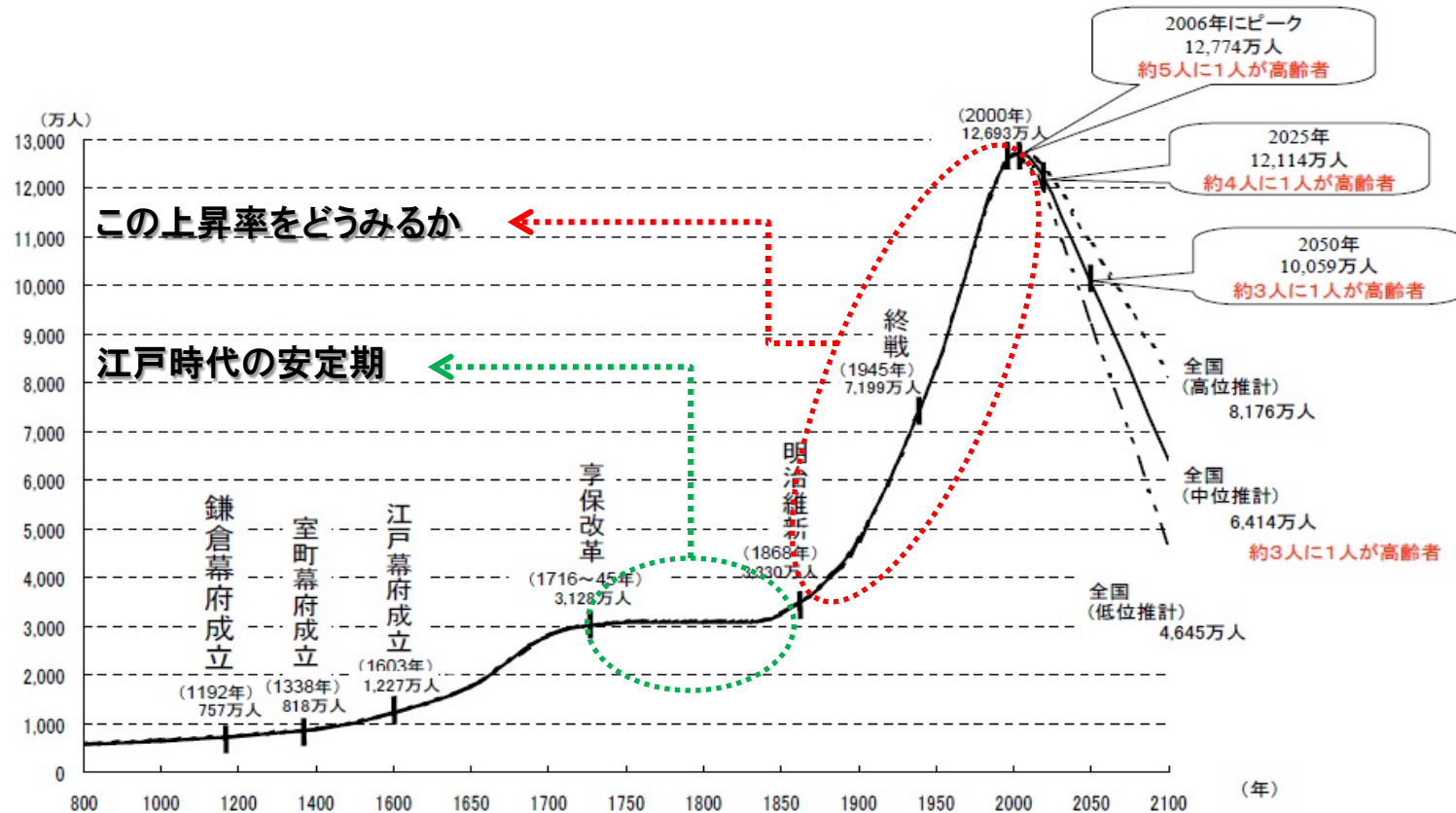


- ✓ 日本近代史家・思想史家である渡辺京二は、江戸時代末期から明治時代の初期に日本を訪れた多くの外国人たちが見た「日本の情景」と「日本人の姿」を、『逝きし世の面影』という著書に綴った。

人口の長期推移[国土交通省資料]

我が国の人口の長期的推移

我が国の総人口は、2006年をピークに減少に転じ、2050年には1億59万人と予測されている(中位推計の場合)。



(出典) 総務省「国勢調査報告」、同「人口推計年報」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成14年1月推計)」、国土庁「日本列島における人口分布変動の長期時系列分析」(1974年)をもとに国土交通省国土計画局作成。

異邦人のつぶやき

- ✓この著書は歴史学研究や日本文化研究といった高尚なものではない。
- ✓したがって、たんに海外から日本を訪れ一定期間そこに滞在した外国人たちの感想の寄せ集め——ツイッターのつぶやき程度——に過ぎない、といった一部の専門家や知識人からの批判もある。

アーノルドの印象

- ✓ たとえば、福澤諭吉とも親交のあった東洋学者で詩人のエドウィン・アーノルドは、当時の日本と日本人のことを「その景色は妖精のように優美で、その美術は絶妙であり、その神のように優しい性質はさらに美しく、その魅力的な態度、その礼儀正しさは、謙譲ではあるが卑屈に堕することなく、精巧であるが飾ることもない。これこそ日本を、人生を生甲斐あらしめるほとんどすべてのことにおいて、あらゆる他国より一段と高い地位に置くものである」と語り、西欧には存在しない風変わりな文化と一種独特な価値観をもつ民族を称賛した。



[出典:ウィキペディア]

オリファントの手紙

- ✓ 水戸藩を脱藩した攘夷派浪士が在日本英国公使館を襲撃した「第一次東禅寺事件」の当事者であることでも知られる、イギリス外交官のローレンス・オリファントにしても、母親に宛てた手紙に「日本人は私がこれまで会った中で、もっとも好感のもてる国民で、日本は貧しさや物乞いのまったくない唯一の国です」と書いた。



[出典:ウィキペディア]

パーマーの見た光景

- ✓ 日本の近代的水道事業を主導して横浜水道を完成させたヘンリー・S・パーマーは、日本人の印象を「誰の顔にも陽気な性格の特徴である幸福感、満足感、そして機嫌のよさがありありと現れていて、その場所の雰囲気にとぴったりと融けあう。彼らは何か目新しく素敵なお眺めに出会つか、森や野原で物珍しいものを見つけ、じっと感心して眺めている時以外は、絶えず喋り続け、笑いこけている」と述べた。



[出典：横浜市市民局]

在りし日の風景

✓その具体的な例を挙げよう。エドウィン・アーノルドは当時の日本人の日常の生活を以下のように描写している。



[出典:ウィキペディア]

在りし日の風景

✓「これ以上幸せそうな人びとはどこを探しても見つからない。喋り笑いながら彼らは行く。人夫は担いだ荷のバランスをとりながら、鼻歌をうたいつつ進む。遠くでも近くでも、『おはよう』『おはようございます』とか、『さよなら、さよなら』というきれいな挨拶が空気をみたす。夜なら『おやすみなさい』という挨拶が。この小さい人びとが街頭でおたがいに交わす深いお辞儀は、優雅さと明白な善意を示していて魅力的だ。一介の人力車夫でさえ、知り合いと出会ったり、客と取りきめをしたりする時は、一流の行儀作法の先生みたいな様子で身をかがめる」

やすらぎに満ちた世界

- ✓ そしてアーノルドは次のような結論を示す。
- ✓ 「この独特で、比類するものなく、スプイルされず、驚異的で魅惑的で、気立てのよい日本を描写しようとつとめながら、私はどんなにそれが描写しがたいか実感している。彼らのまっただなかでふた月暮してみても、私は日本に着いて二週間後に大胆にも述べたことを繰り返すほかない。すなわち、よき立ち振舞いを愛するものにとって、この“日出る国”ほど、やすらぎに満ち、命をよみがえらせてくれ、古風な優雅があふれ、和やかで美しい礼儀が守られている国は、どこにもほかにありはしないのだということを」

東北のまち

- ✓ 一方で、イギリスの女性紀行作家で『日本奥地紀行』を著したことで知られるイザベラ・バードは——僻地における極貧生活もつぶさに観察したうえで——米沢平野については「美と勤勉と安楽にみちた、うっとりするような地域」と表現している。そして「米沢平野は南に繁栄する米沢の町、北には人で賑わう赤湯温泉をひかえて、まったくのエデンの園だ。“鋤のかわりに鉛筆でかきなされた”ようで、米、綿、トウモロコシ、煙草、麻、藍、豆類、茄子、くるみ、瓜、胡瓜、柿、杏、柘榴(ザクロ)が豊富に栽培されている。繁栄し自信に満ち、田畑のすべてがそれを耕作する人びとに属する稔り多きほえみの地、アジアのアルカディアなのだ」と語る



[出典:ウィキペディア]

文明の大転換

✓この『逝きし世の面影』には、すでに失われた「ひとつの文明」の姿が記されている。



[<http://bbs.kyoudoutai.net/blog/2015/08/4482.html>]



[<http://tunagaru.jp/gourmet/2015/01/4424/>]

気持ちのよい社会

- ✓ 渡辺が「私にとって重要なのは在りし日のこの国の文明が、人間の生存をできる限り気持ちのよいものにしようとする合意とそれにもとづく工夫によって成り立っていたという事実だ」と語るとおり、忘れられた文明と、そこに暮らす日本人の姿が、まるで現代を生きる読者にバックキャストイングを促すかのような構成で描かれている。

生活総体

- ✓ 文明とはひとつの「システム」である。
- ✓ 本書での渡辺の言葉を借りるならば、文明とは「ある特定のコスモロジーと価値観によって支えられ、独自の社会構造と習慣と生活様式を具現化し、それらのありかたが自然や生きものとの関係にも及ぶような、そして食器から装身具・玩具にいたる特有の器具類に反映されるような、そういう生活総体」である。
- ✓ すなわち、諸々の要素がお互いの存在の前提を供給しあいながら存在し、その相互に依存しあう複数の要素により構成される全体である。

失われた文明 コモンズと定常経済

コモンズとバナキュラー

- ✓ 異邦人たちが目にした江戸時代末期から明治時代初期までの日本人の生活空間には、オーストリアの哲学者イヴァン・イリイチが語るところの「コモンズ」(共通価値を創造する共用環境)の存在と「バナキュラー」な価値(市場化されない価値)がみごとに映し出されている。

暮らしの工夫

- ✓この時代の暮らしには周囲を海に囲まれた日本という場所を、正確にはその島を構成する夥しい数の生活空間を、豊かで気持ちのよい場所にするための——相互主観的に形成された——合意があり、その暮らしを維持していくための土台には、自然と人間が永続的に共生していくための「定常経済」がある。

埋葬された文明

- ✓ヒューズケンが「西洋の人々が彼らの重大な悪徳をもちこもうとしているように思われてならない」と予感したように、まさに新たな文明は、このような「定常経済」を否定し、補完性あるいは互酬性の原理を内包した「コモンズ」を徐々に解体し、「バナキュラー」(市場で売買されないもの)には無意味で価値のないものというレッテルを張って、埋葬してしまった。

コラム：追憶

わたしが人生の前半を過ごした横浜の実家では、年末が近づくと、懇意にしていた近所の植木職人に庭木の手入れをお願いするのが年中行事の一つになっていた。

幼いころ(たしか小学2年生か3年生の頃だったと思うが)、年の瀬も押し迫った小春日和の穏やかな昼下がり、祖母と二人で縁側に腰掛けて馴染みの植木職人の仕事を眺めていた。

そこで祖母と交わしたなにげない対話が、ときおり思い起こされる。

祖母がなんともうれしそうなので「おばあちゃん、なんでニコニコしているの？」と尋ねると、祖母は「ほら見てごらん、植木屋さんが楽しそうに仕事をしているよ、ありがたいねえ、おかげで楽をさせてもらっているよ」と、まるで独り言のようにつぶやいた。

その返答に困ったわたしが、すこし間をおいて「そうなのか、おばあちゃんは植木屋さんに楽をさせてもらっているんだね」と応えようと、祖母は続けて「“働く”という言葉には“ハタ”を“ラク”にするという意味が込められているんだよ」、「マー坊(祖母にはそう呼ばれていた)も大人になったらみんなを“楽”にしてあげるために仕事をするんだ」、「そのためにたくさんのことを学ばなければいけないね」と、幼いわたしにも理解できるように、笑顔の理由(わけ)を教えてくれた。

[M.KAWAI 2016]

コラム：身体化された記憶

ふだんは意識の深層に眠っている大切な記憶が、なにかのタイミングで鮮明によみがえってくることがある。

当時のわたしには祖母の深意を理解することはできなかったが、祖母が他界したあと、祖母との思い出をたどるなかでよみがえってきた記憶が、わたしのアイデンティティ形成に影響をあたえている。それは身体化された記憶といってもいい。

まさに死者との対話なのかもしれないが、このときあらためて、祖母はわたしのなかで、正確にはわたしの自我の形成過程において、“意味のある他者”となった。

なるほど、仕事とは本来「人間的な」活動であり、働くことの本質は他者のためにある。そして「働き方」は、その時代の生活様式に組み込まれている。

したがって他者の存在なくして働くことの意味が見出せないのは、ある意味で当然のことなのであろう。

[M.KAWAI 2016]

ヒューマニズムとコスモロジー

大森荘蔵からのメッセージ

- 科学的世界において飼い
ならされた思考を解放する
- ケアとキュアの間にある深
い谷を埋める～重ね描き

囚われた心を解放するために

～飼いならされた思考からの脱却～

- ✓ 大森荘蔵は著書『知の構築とその呪縛』のなかで、ガリレオ・ガリレイ(Galileo Galilei)が『偽金鑑識官』で語った科学的世界観、いわゆる二元論を特徴づける一節を紹介している。



密画と略画

- ✓ ガリレイは、「わたしがあつ資料とか物体を考へるとき、ただちにイメージとしてえがく必要にかられるのは、つぎのようなものだと考へます。つまり、そのものが、しかじかの形をして境界と形態を持つており、他のものとくらべて大きいか小さいか、また、しかじかの場所に、しかじかの時刻に存在し、運動しているか静止しているか、他の物質と接触しているかいないか、一個か多数個かということなのです。いかなるイメージを作る場合にも、物質をこれらの条件から切り離して考へることはできません。しかし、その物質が、白いか赤いか、苦いか甘いか、音を出すか出さぬか、芳香を発するか悪臭を放つかという、こういった条件をかならず含めてその物質を理解しなければならぬとは考へません。それどころか、もし諸感覚がわたしたちにともなつていなければ、理性や想像力それ自身だけでは、それらの性質にまでは到達しないはずなのです。したがつて、これらの味や匂いや色彩などは、それらがそこに内在している主体の側からみると、たんなる名辞であるにすぎないのであり、たんに感覚主体のなかにそれらの所在があるにすぎない、とわたしは思ふのです。だから、感覚主体が遠ざけられると、これらの性質はすべて消え失せてしまうのです」として、
- ✓ 世界の究極の細密描写は幾何学・運動学的描写であつて、色・音・匂い・手触り等の描写は人間の主観的世界像の描写である、という二言論的世界像を築き上げた。
- ✓ 色も匂いもない、形と運動だけがある物質、大森はこれを死物と呼んだ。そのことからすれば、科学は人間の体も死物化してしまつたということなのだらう。

感性と想像力を取り戻す

- ✓ この死物化は、ガリレイの主張にみられるような「物」を数量的あるいは数学的に把握したことが原因なのではなく、それを幾何学的・運動学的な描写のみで語り尽くしたがために、それが人類全体の世界観を形成することになった、そのことに起因する、と大森はいう。
- ✓ そして以下のような提案をしている。
 - 「物と自然は普通に活きている。ただ現代社会はそれを死物言語で描写する。だがわれわれは安んじてそれに日常語での活物描写を「重ね描き」すればよいのである。ここで大切なのは、その日常言語による活物描写は、「自然」そのものの活写であって、われわれの「内心」の描写ではない、ということである。陰うつな空とか、陽気な庭とかというとき、陰うつや陽気は私の「心の状態」ではなく、空自身の、庭自身の性質なのである。無情非情の空や庭が私の内なる心に陰うつとか陽気な「情感」を引き起こす（これがデカルト二元論の考えである）のではなく、空や庭そのものが陰うつさや陽気さをもっているのである。空の青さや庭の明るさが空や庭自身のものであるように。一言でいえば、空や庭は有情のものであり、誤解を恐れずにいえば、心的なものなのである」として、
- ✓ 世界を覆っている科学的世界観すなわち密画的世界観に、「自然のなかに人間は組み込まれている」あるいは「自然はいきている」という感覚から生まれる略画の世界を「重ね描き」すればよい、というのである。

地域包括ケアとまちづくり

まちづくりの思想

1. “まちづくり”は住民参加型の取り組みであり、
2. 住民自身の生活の延長線上にある活動である。
3. それは「わたしのまち」という自信と誇りに裏付けられたものでなければならない。
4. もっとも大切なことは、それが住民一人ひとりの生活の内実を豊かにするものである、という暗黙の共通認識である。
5. そのためには地域における産学官民のパートナーシップと連携が推進され、その活動は地域に住まうすべての住民の自立と主体性を重視するものでなければならない。

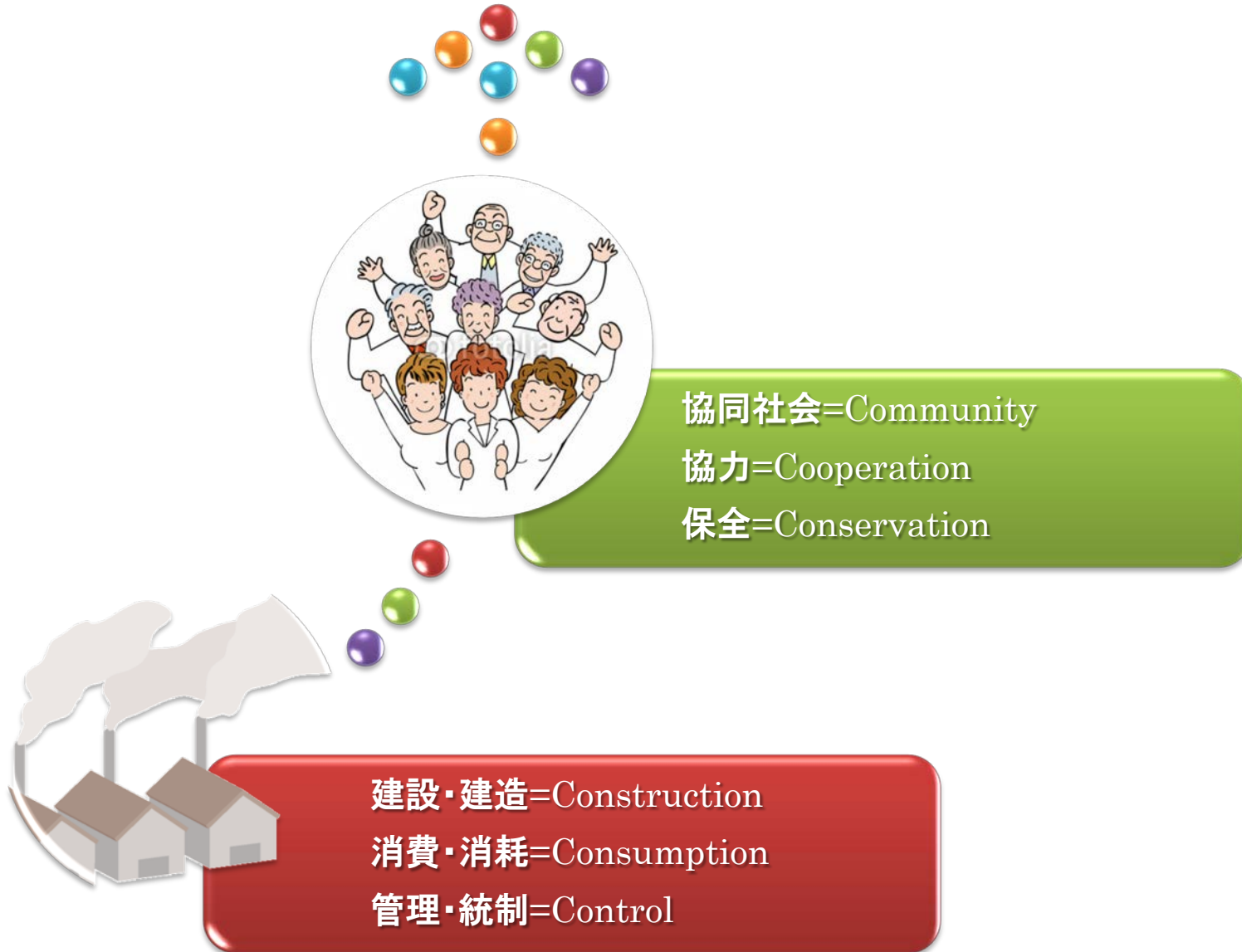
地域で働くということ

1. 土地を愛し、人を愛す。
2. なんのために働くのか？
 - ✓ 社会的課題を解決するために働く～創造力と想像力
3. 等身大の世界を生きる
 - ✓ グローバルとローカル（開くためにこそ閉じる）
 - ✓ 人間力の回復～感性を磨き、想像力を高める
 - ✓ 21世紀の貨幣論～お金と資源を再考する
4. 経済のフレーム・オブ・レファレンス
 - ✓ 「市場の論理」からの解放
 - ✓ バナキュラーとコモンズ
5. 地域ビジネスは「まちづくり」である。

高齢社会のまちづくり

- ✓ 高齢社会における「まちづくり」は、「urban development」ではなく「community planning」である。
- ✓ つまり地域に住まう住民が主体性をもって、地域の風土的個性を生かした産業と文化を内発的に作り上げていくものであり、それは暮らしの改善であり文化の再生である。
- ✓ また暮らしを考えるということは、自分に適した生業をもって働き、家庭を築き、子どもを育て、そして自立させ、いずれは老いて死を迎える過程を、各人がどうイメージするかということであり、このようなライフ・サイクルが分断されてしまった議論には、リアリティがない。

20世紀の3Cから21世紀の3Cへ



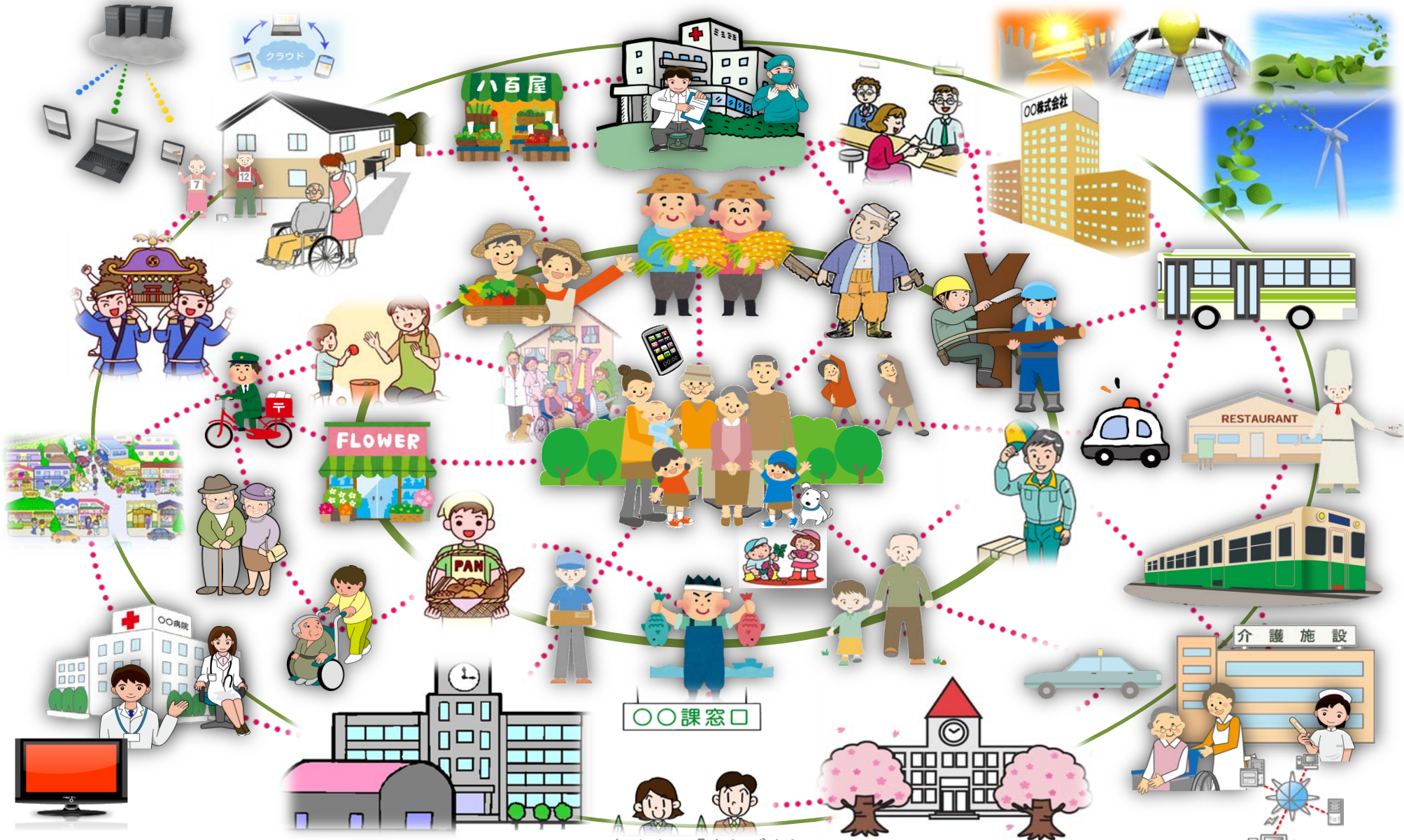
『空虚な樂園——戦後日本の再検討』

～オーストラリア国立大学名誉教授ガバン・マコーマック氏からのメッセージ～

- ✓ 「私が33年前から知っているこの日本の国を傷つけてきた、便利さと利益の追求のみに傾倒し、ひたすら拡大をつづけてきた近代的企業社会の拡大も押しもどされるだろう。と、このように私は考えたい」
- ✓ 「私が生きているうちにこうした従来の動きが逆回転するとは思えないが、幸いに私が生まれ変わることができれば、私が改めて見出す日本は、ちょうど高度成長が始まりかけた1962年に私がはじめて出会ったすばらしい美しさと、蘇った地域社会、世界への門戸開放、ゼロ成長の経済と排出物ゼロのテクノロジー、そして汚染・破壊された山や河川や海の回復などにもとづく脱成長期の秩序の知恵と円熟とが結びついた国であってほしい」

➤ ガバン・マコーマック(著)、松居弘道・松村博(訳)(1998)『空虚な樂園——戦後日本の再検討』みすず書房

自然と人間の協働による永続的な地域づくり



END

ご清聴ありがとうございました